

ふる やど みち の うえ  
古宿道の上遺跡

—西保保育園建設に伴う敷石住居址等の発掘調査報告書—

1981

山梨県東山梨郡牧丘町教育委員会

## 「古宿道の上遺跡」発刊のあいさつ

牧丘町教育委員会

教育長 竹居治久

古宿道の上遺跡は縄文時代中・後期の誠に価値のある遺跡であります。今度県文化課の諸先生方の御尽力により発掘調査復現され、全貌が明確になり、更に学術研究報告書が完成し刊行の運びとなりました。

県及び町担当者の皆様の御労苦に対し深く感謝致します。

牧丘町は自然環境に恵まれ数多くの文化財が存在し、或は土器の破片など各所から発見され早くから埋蔵重要物件の存在が予測されていたのであります。

保育所の建設に当たり発見された古宿道の上遺跡は町北西部標高七百八拾米の山間地帯で秩父山系前山帶那山東麓に添って東西に流れる鼓川の左岸に位置し、東南傾斜地で日照良く北風に遮蔽し更にこの地域一帯湧水は豊富にして古代の情景を想定しても住居地として最適の条件を備えた地域を選定されて居ります。

今回の発掘で縄文時代の敷石住居跡と平安時代のかまど跡が発見されて居ります。狩猟時代は一地区数軒が存在した様式から考え他にも幾軒かが數千年の眠りを保つていると推定されます。

貴重な遺跡でも現形を保存することの出来ない条件にある箇所が多い中で完全に復現し保存することが出来ました。従って何時でも視察研究が行える点大きな特色をもつものと存知ます。

先人の偉大な足跡を記録した本書は先祖の生活様式を究める貴重な文献であり、多数の皆様が活用され又考古学研究の資とされることを望むものであります。

# 目 次

序		
例 言		
第 1 章	経 過.....	3
第 2 章	位置及び環境.....	3
第 3 章	層 序.....	10
第 4 章	縄文時代の遺構と遺物.....	10
1 遺 構.....	10	
2 遺 物.....	10	
第 5 章	平安時代の遺構と遺物.....	32
1 遺 構.....	32	
2 遺 物.....	32	
第 6 章	結 び.....	34

## 例 言

1. 本書は町立保育園建設に伴う発掘調査報告書である。
2. 発掘は県教育庁文化課職員森和敏、同森本圭一、同末木健が現地指導を行い調査した。
3. 本書の編集は森と小林が、写真撮影は森が、遺物実測は信藤裕仁（国学院大学生）、森  
がトレースは小林たつ子（甲府市）が行った。
4. 執筆は森がした。
5. 発掘参加者は次のとおりである。

二に掲げた文化課職員、山梨県遺跡調査団調査員大村和夫、同折井忠義、同  
渡辺礼一、同萩原三男、同菊島美夫、町役場、教育委員会職員、笛川中学校  
郷土研究クラブ眞芳賀和幸、同信藤裕仁、同奥山正美、同大竹林、同鶴田寿  
一、同奥山寿一、同堀内勇二、同古川一也、同武藤敏、同温井一郎、同佐藤  
邦城、同神津幸浩、同大村信二、同古明地城二、同奥山邦夫、同武藤孝貞、  
同クラブ担任教諭奥山先生、機山高校奥山永雄、山梨大学生渡辺孝子、同宮  
下敬子、同井上秋子

## 第1章 経 過

昭和48年5月上旬、周知の遺跡である古宿道上遺跡に、牧丘町立西保保育園を新設したいとの連絡が町役場大村和夫氏から県教育庁文化課にあった。文化課では同月7日に、波本井係長以下職員三人を派遣して現地を視察し、町教育委員会・役場と打合せて、文化課職員の指導で、事前に緊急発掘調査を行って記録保存することになった。発掘作業員等が不足したため、調査は充分とはいえないが、以下のとおり一応の記録を得た。

発掘調査は同月18日から27日までの間の8日間で行い、2号敷石住居址は整備し、保存展覧に供することに決定した。

18日に文化課職員森・森本・末木及び町役場・教育委員会職員約10名によって、グリッドが設定され、発掘が開始された。この日に早くも1号敷石住居址、2号敷石住居址や平安時代のかまと址などが検出され始めた。引続いて検出された造構があるグリッドを拡張し、20日から3日間町立笛川中学校郷土研究クラブ員約10人の応援も得て、ほぼ造構の全体を検出し、この間に山梨県遺跡調査団長井出佐重氏や文化課長等が視察された。発掘期間の後半に2号敷石住居址を中心に、造構の細部の検出と、尖測、写真撮影等の記録を行った。21日に町当局は、ほぼ完全に遺っている2号敷石住居址を貴重な遺構と判断し、後世に遺して、展示出来る施設にしたいとの意向を固めた。この造構は発掘終了後、保育園の建設と同時に、周囲に溝を掘って見学通路とし、その上部50cmの高さで、セメントで覆って保存施設をし、説明板を設置した。昭和51年3月31日に町指定史跡となった。

その後、遺物整理及び報告書作成作業をする機会がなく、遅ればせながら、53年度と54年度に森の責任において行った。

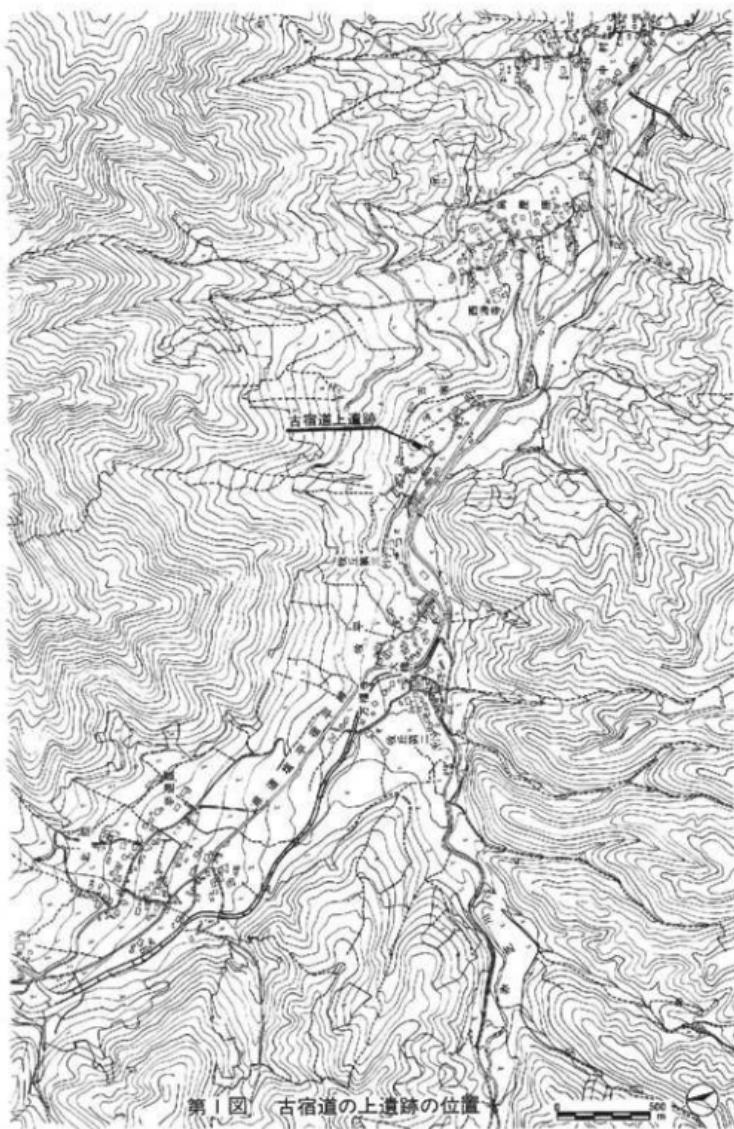
なお、昭和53年度中に発行される予定の牧丘町誌に、その発掘調査概報を掲載したいとの依頼があったので、関係者の了解を得て、森本、末木、森の責任（文責森）で、本報告書発刊前に発表した。

## 第2章 位置及び環境

発掘場所の位置は、牧丘町西保中小字古宿道上一九四三番地である。西保中公民館の北側にあり、笛川の上位河岸段丘上で、標高740mの地点にある。

秩父連山が甲府盆地に張り出している山中に笛川が東に流れている。この遺跡は笛川の中流域の左岸（北側）にあり、ここから笛川の渓谷は6km続き、笛吹川の渓谷に出る。笛吹川はこの付近から甲府盆地の副盆地を南に流れ、甲府盆地の東辺を通って釜無川と合流して富士川となる。

遺跡のある河岸段丘は笛川の左（北）岸にあり、東に傾斜し巾約130m、長さ約300mで、今回発掘した地点はこの中間あたりに位置していて、桑畠であった。南と北には、北高約80mから

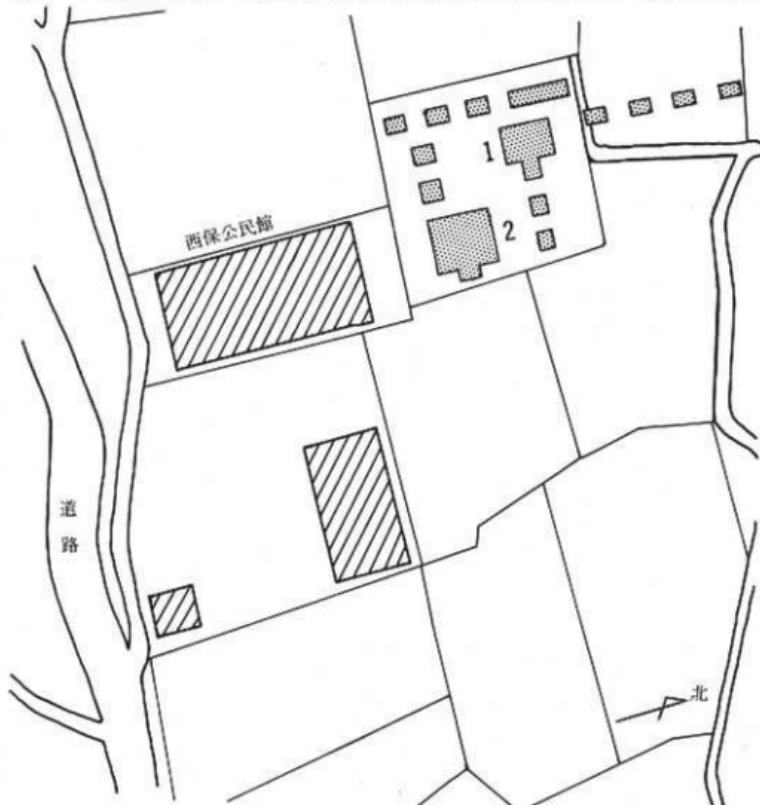


100mの山がせまっているが、渓谷の上流と下流は見通しがよく、また鼓川までの比高は20～30mあり、生活の場としては、比較的安全な土地といえる。

鼓川の両岸約8kmには、環境のよい、発達した河岸段丘が数ヶ所あって、そこには後述するように縄文時代中・後期や平安時代などの遺物散布地が多くある。この遺跡はこの中の一つである。自然環境を端的に述べれば、秩父連山の山中に流れる鼓川の河岸段丘上にあるといえよう。

この遺跡のある付近の河岸段丘は2段になっていて、下位河岸段丘は現在は西保中の部落があり、上位段丘は畑・水田や宅地になっている。

古宿道上遺跡は上位段丘にある。昭和47年に山梨県教育委員会が作った埋蔵文化財包蔵地調査カード（古屋善博調査）によると、遺跡がある範囲を1940、1941、1942-1、1942-2、19



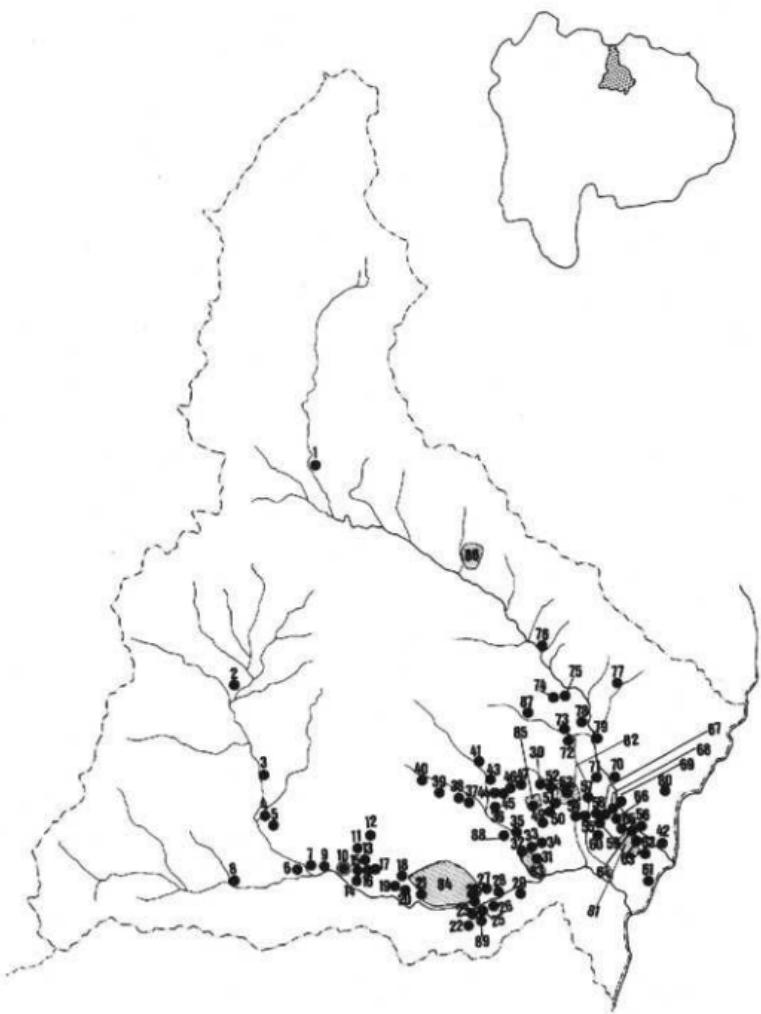
第2図 付近及びグリッド設定図

1. 1号鐵石住居地、平安時代カマド検出地点  
2. 2号鐵石住居地検出地点

43、1944番地とあり、広さは約60m×50mである。昭和28年隣接地の1942番地の1で西保公民館建設工事整地中、石皿1、凹石1、黒曜石破片、土器破片が発見されたとあり、土器型式は諸磯式、勝坂式、加曾利E式、堀之内式、加曾利B式が検出されたようである。従って前期末葉から後期初頭にかけての土器片である。しかし今回は井戸尻式または曾利式前半期から称名寺式並行期・堀之内式土器だけである。この中、井戸尻式または曾利式前半期のものは、わずかに2～3片と少量であり、諸磯式は検出出来なかった。

また平安時代の国分式土師器を伴ってかまどが1944番地で検出されているが、その遺跡の範囲は確認出来なかった。

遺跡の詳細な範囲の確認はいずれにしても未だ充分とはいえないし、その内容についても今回の発掘だけでは、解明出来たとはいえない





第4図 古宿道の上遺跡表面採集の土器（最下段 土師器）  
信藤裕仁作成



第5図 付近出土の後期土器 上3列東破魔射場 下2列西破魔射場  
中3列奥破魔射場  
信藤裕仁作成

## 第3章 層序

地層の観察をすると、縄文時代の敷石住居址が廃絶後ロームが2次堆積し、その上を土石流が覆ったものと考えられ、さらにその上に平安時代の遺構が遺されていた。

標準層序は第一層が耕作土で約50cmの厚さで、第2層が暗褐色土、第3層が褐色土、第4層は黒色土、第2層、第3層と第4層は大小の角礫や円礫を包含している。この3層は入り乱れており、第1層との境界は凹凸がはげしく、第5層との境界はなめらかである。従って第2層・第3層・第4層は、大きくは同一層と見られる。第5層は二次堆積したローム層で約平均10cmで遺構の上を覆っている。

第1号敷石住居址上のセクション図は第7図であるが、第2・3・4層を同一地層とみなしたもので、第5層を欠いている。第7図S・P・BとS・P・B間は上(西)方から下(東)方を示すもので、水糸に対して地表面と第1層と第2層との境界線が並行して傾斜している。第7図S・P・CとS・P・C間は水糸に対して、地表面・第1層・第2層・第3層間のそれぞれの境界線が並行している。これは傾斜する方向に対して直角のセクションだからである。第7の上図は第7の下図と同様な地層を示している。

第2号敷石住居址上のセクション図は第11・12図である。第11図S・P・AとS・P・A間は第12図と同様に地層は傾斜しており、第11図は第7図と同様傾斜がない。この両図とも第2・3・4層は入り乱れており、その中に大小の角礫や円礫が混入していて、その石群の傾斜角は不規則的である。山崩れ等によって土石が流出した様相を呈している。第11図の第5層と遺構面との境界線は入っていないが、中心より右寄りに第3層と敷石住居址の張出部分を構成する石面があり、ここには第5層の堆積はない。第12図は第10図S・P・BとS・P・B間の写真である。

なお平安時代のかまどと思われる遺構のあったセクション図はないが、第2層に遺構が含まれていた。

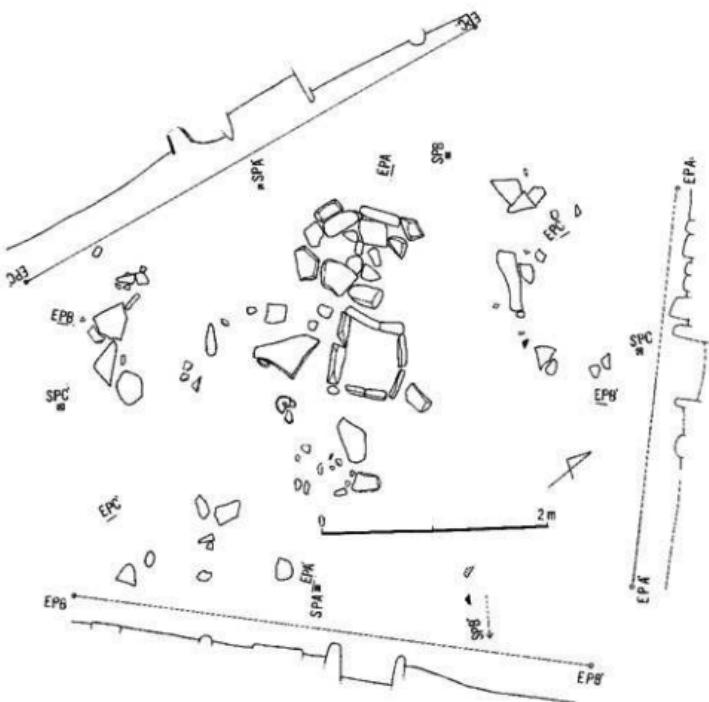
## 第4章 縄文時代の遺構と遺物

### (1) 遺構

#### 1号敷石住居址 (図版6、7、第6図)

2号敷石住居址から北西に約20m離れた地点にあった。敷石の大部分は取り去られたり搅乱されていたが、石匂かを中心にして敷石の一部が残存していたり、搅乱された石が散乱していた。

石匂かは扁平な石を立てて構築していて、その内部には焼土は検出出来なかった。炉址の南へ50cmの位置に埋甕があり、付近から土器片が多く出土した。搅乱されていない敷石で、炉址から最も遠いものが約2mあるので、住居の円形部の直径は約1mくらいと推定出来る。張出部は搅乱のため確認出来なかった。この敷石を構成した石の中には研磨された石棒や円形の石

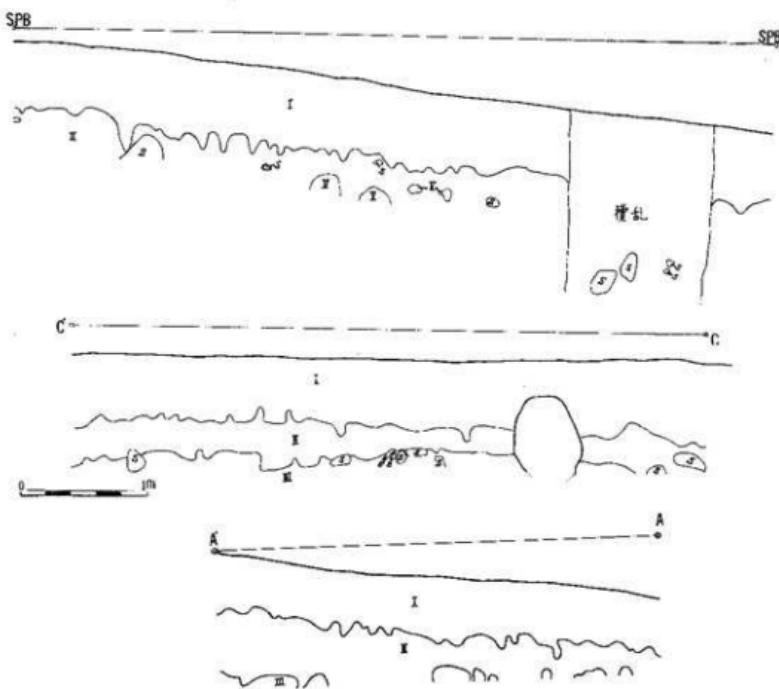


第6図 一号敷石住居址平面図及びエレベーション図

が数個あり、凹石やたたき石等が6ヶ発見された。住居址の形態は平地式と思われ、セクションでも平面上からも、呑穴を掘り込んだ形跡は見られず、また柱穴も検出出来なかった。

炉址は方形を呈し内面で約70cmである。敷石の多くは扁平で、大きい石は長径約80cm、厚さ3cmくらいである。そのほとんどは隣接する陂川にみられるものである。住居は地層の状態から推察すると張出部以外の部分は円形と思われる。住居内の地面を良く観察すると擾乱された形跡はないので、敷石は廃絶後まもなく取り去られたものと考えられる。また住居外の生活面もほとんど擾乱された様子はみられない。

遺物は、そのほとんどが住居址の上部の覆土から検出されたものである。敷石上から出土したものはない。前述した坪裏があったのだが、保管中紛失したようで、ここに示すことは出来ないが、記憶によると曾利V式くらいに比定出来るものであった。破片もこの坪裏の時期に近いものが多い。



第7図 1号敷石住居址セクション図

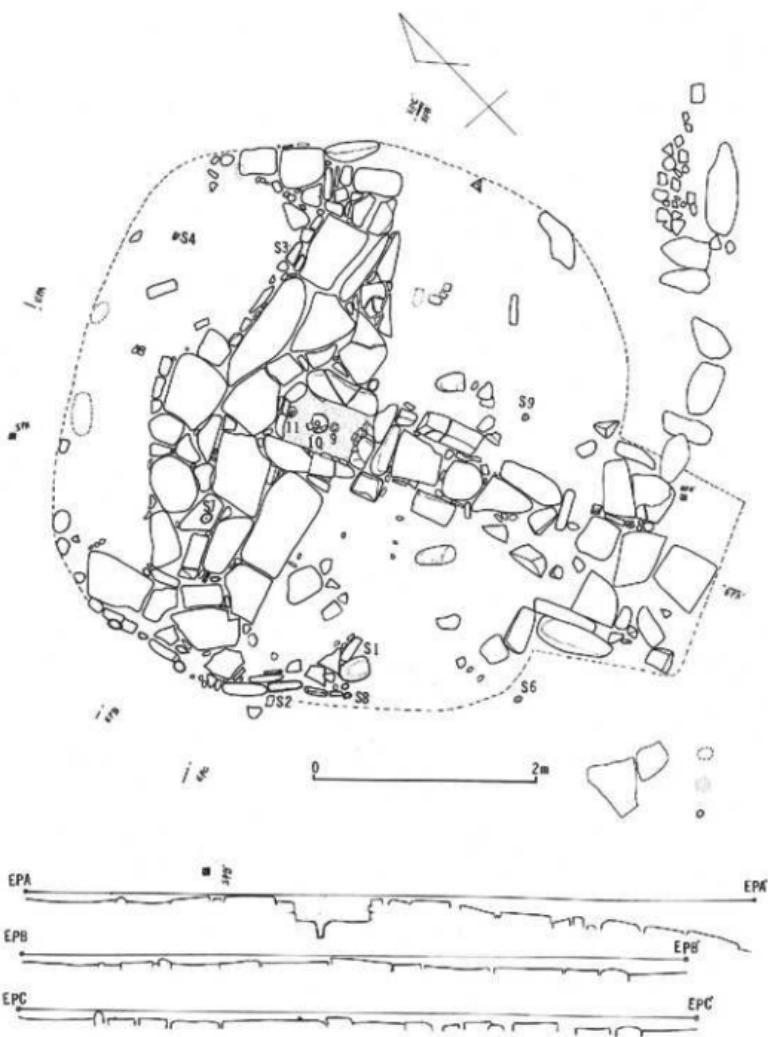
なお今回は1号、2号敷石住居址付近と平安時代の住居址と思われる場所だけに発掘範囲をとめた。

以上のことからこの住居址の築造された時期は埋甕や出土土器片からみて、中期終末の曾利V式に比定出来るものと思われる。

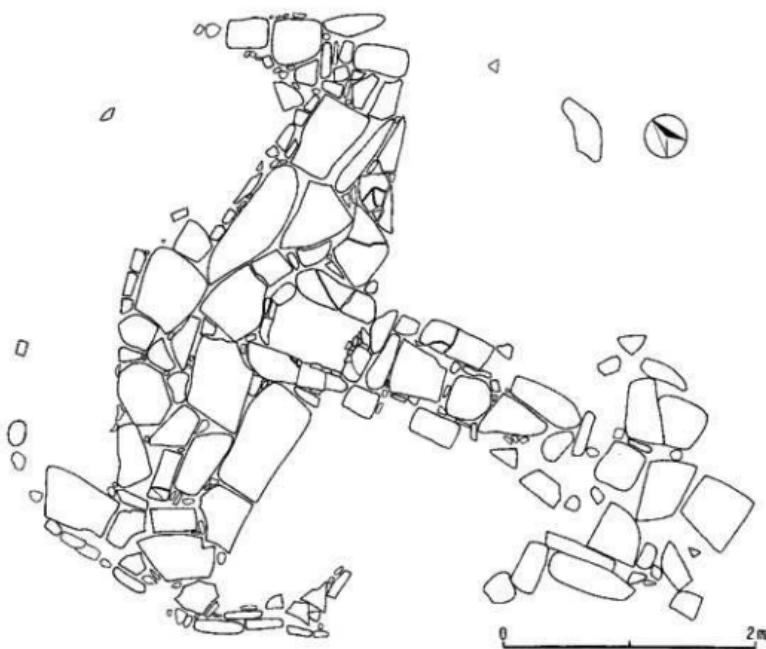
#### 2号敷石住居址（図版6～17、第8～12図）

1号敷石住居址の東南約20mの位置で、発掘2日目、石と土が堆積していた下層で発見された。ほぼ完全な柄鏡型の住居で、敷石は炉を交点とするT字形を呈している。

敷石は節理で出来た扁平な大きい石を使用している。大きいものは長径1.14m、短径34cmのものや長径90cm、短径45cmのものなどがある。敷石の縁辺は、石の直線の部分を出してきっちり直線を描いていたり、また欠損した石棒（3ヶ以上）などの長い石や丸い小石で縁取られている。住居址の北縁は極めて小さい石（図面に書けない程の）を使用して、その境界を引いている。また西南の隅（張出部の反対側）の突端部から、縁石をY字状に二叉に分けていて、内



第8図 2号散石住居址平面図及びエレベーション図



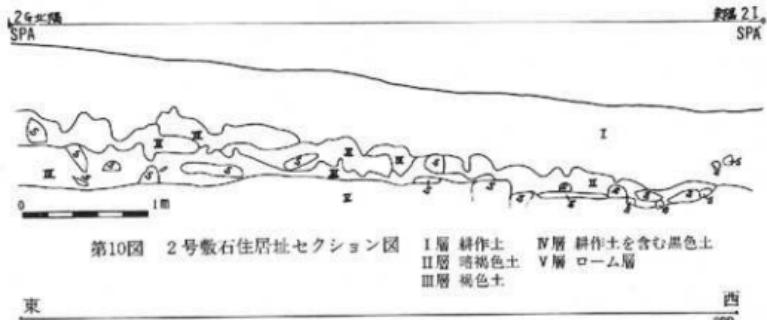
第9図 2号敷石住居址平面図

側の右列は、飛び飛びではあるが、北西の敷石の尖端部へと連なっている。外側の石列は3m位統一していたか攪乱を受けてなくなっている。張出部から東北に向って転石が乱雑に約3m並べられていて、先端には小石の集石がある。これはこの住居址に付随した遺構であるかどうか議論の別れたところである。張出部の南側（石列の反対側）には大きい石の集石があり、その一部は並んでいるとも見られる部分があるが、やはりこれを遺構とみるか、これに付随したものとみるかどうか判断が明確に出来なかったところである。ただ自然によって集石が形成されたものではないことは明らかであった。敷石の全体の形状は過去発掘されたものと異にしており、その平面図は飛行機型とでも呼べるような形を呈している。この形状は敷石住居が形式化と省略化が極度に進んだ結果もたらされたもののように思われる。

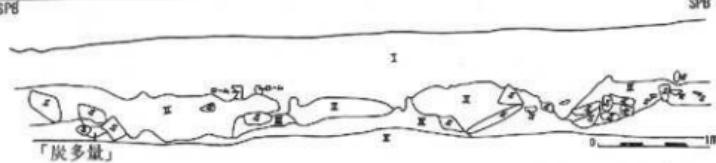
住居は平地式である。柱穴は縁石より内側にも外側にも検出出来なかった。

次に遺構の各部分についてみると次のようである。

炉址は2~3段の石積で出来ていて焼土ではなく、石の積み方は、炉内に対して、横に積んである（炉内に対して奥行を長く使っていない）し、また裏込めの小礫も入っていないので崩れ



第10図 2号敷石住居址セクション図  
I層 耕作土 IV層 耕作土を含む黒色土  
II層 暗褐色土 V層 ローム層  
III層 褐色土



第11図 2号敷石住居址セクション図  
I層 耕作土 VI層 耕作土を含む黒色土  
II層 暗褐色土 V層 ローム層  
III層 褐色土



第12図 2号敷石住居址セクション

やすい。敷石を構成する転石の中には明らかに研磨されて丸味を帯びている石が数箇あり、また、扁平な敷石が部分的に研磨されていると思われる石や切り石様なものもある。炉址付近の敷石には、直径1cm、深さ1cmほどある円錐形の穴が2ヶ所、他にも数ヶ所あって、人工的に穿たれたもののように見られる。遺構に使用されている石質は南に流れている鼓川のものと同じである。

発見された遺物は石器と土器である。石器の多くは遺構自体を構成している石棒である。この石棒のうち、縁石に使用されているものが3本、そうでないものが2本あり、これらは全て欠損品である。他に遺構を構成していない石棒が1本と、石皿が1ヶ、多数の凹石、丸石（すり石か）等が出土した。

遺構について注目すべき事項は、研磨されたり、穴が穿たれたり、切り石様に人工的に加工

された石が多いことである。

土器はほぼ形状が推測出来る3個体と破片がある。この内2個体は、炉址の中に正常位で重ねて埋められていた。他の1個体は張出部に近い敷石の間に埋められていたものである。破片は敷石直上から検出されたものはわずか2片くらいで、他は全て覆土から出土したものであった。遺物について特記すべき事項は、石器の数量が非常に多いことであった。

2号敷石住居址の時期はその炉址内埋藏で、後期初頭の縄之内II式に比定出来るものである。

## (2) 遺 物

### 1号敷石住居址出土遺物（図版14、第13図・第14図）

土器 第13図拓影と図版14写真の同一番号のものは同一遺物である。ここでは地文は条線文と繩文とに分れ、これに伴って隆帶や沈線があるものがある。No.6、No.7、No.11、No.14などは中期末葉の曾利IV式か曾利V式と思われる。沈線だけのNo.10、口縁部に隆帶のあるNo.4、隆帶のあるNo.8等も前述のものとほぼ同一時期であろう。No.1は繩文域と無文域を曲線の沈線で分割しているもので、本県にも見られるものであるが、曾利V式（又は加曾利E式）とも称名寺式とも決めかねている。しかし前述したものより一時期遅いことは確かである。No.5もNo.1と同一時期とみられる。No.2は薄手の口縁部でややくの字型になっており、No.3は口縁部に3ヶ

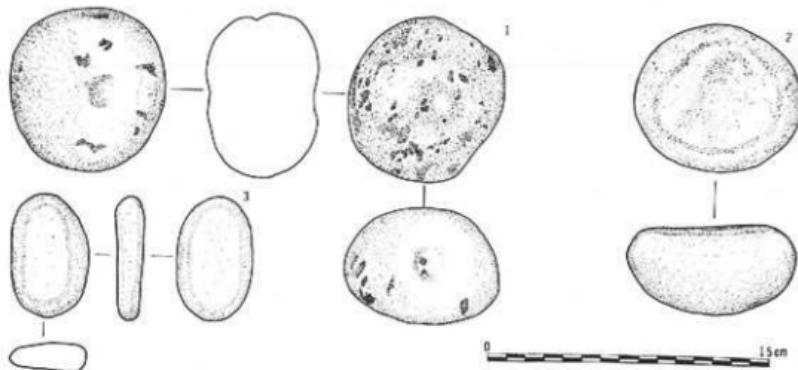


第13図 1号敷石住居址床面直上出土土器

所太い棒状具で刺突しているので前述したものよりやや遅い。堀之内式の初期のものであろう。

石器 No.1は両面と側面に計3ヶの凹みがあり、それぞれの凹みは使用したと思われる痕跡がみられる。No.2は片面の中央が広くわずかに低くなっていて、反対の片面は丸く手に握り易い自然面をそのまま生かしている。No.3は両面の中央が広くわずかに低くなっている扁平なものである。

No.2、3のような石や丸石はこの遺跡で非常に多く出土しているので、意図があって持ち込んだものと思われる。この住居址から出土した石はほとんど鼓川にあるものと同一の石質である。

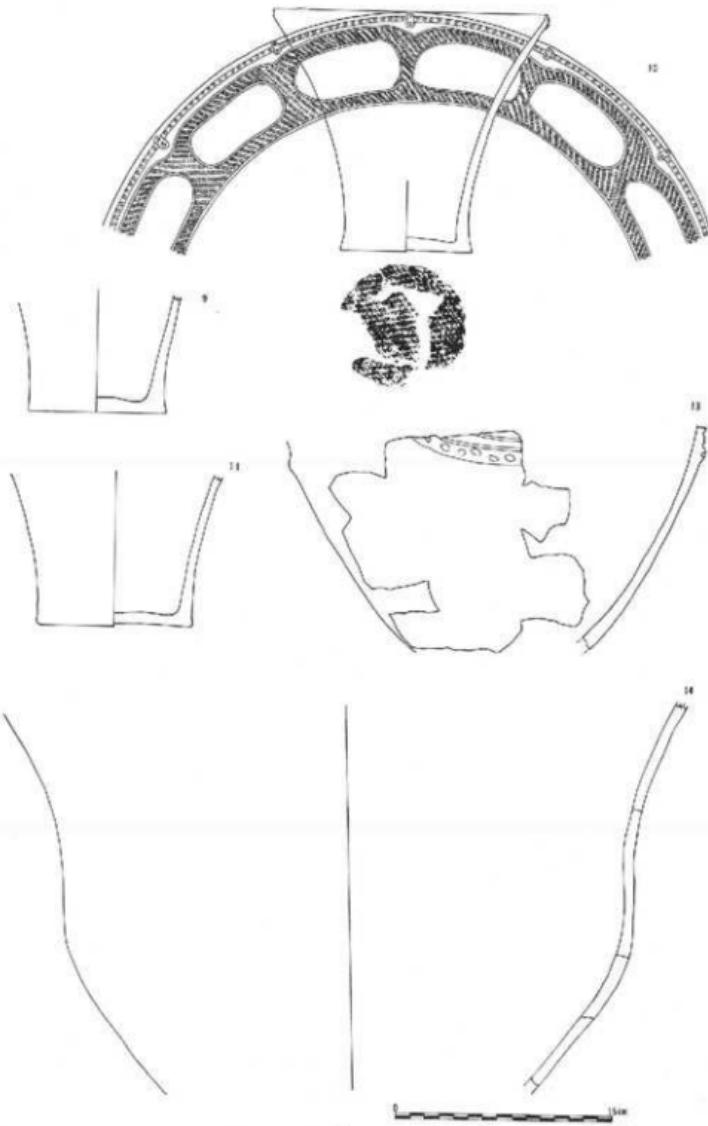


第14図 1号敷石住居址出土石器 1、2、床面上直上 3、第1層

## 2. 2号敷石住居址出土遺物 (第15~30、図版15~24)

土器 堀之内に埋設された土器として第11図No.9~No.11(図版15・16)がある。No.9は復元して完形になったもので、器高約17cmである。口縁に8字文が5ヶ所にあり、その下に細縞文に囲まれた無文の窓状文が5のパターンに分かれている。胴下半部はよく研磨されている。底部から鋭く立上って口縁にかけて朝顔状に開く器形は典型的な堀之内1式である。9・10とも胴下半部であるが前者に酷似した器形である。この他住居址張出部の石の間に埋設されたほぼ完形土器があったのだが残念ながら保管中に不明になっている。これらの土器が2号敷石住居址の使用時期を決定しているとみてよかろう。

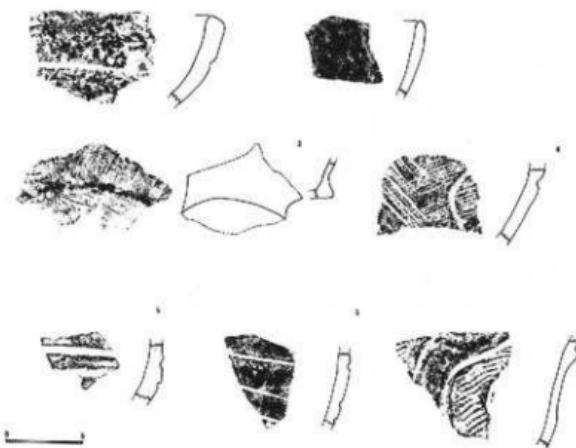
第16図(図版17上)は床面上直上から出土したもので、No.1、2、3、8は曲線の沈線で囲んだ内側か外側の縞文を擦り消している。いずれも曾利V式から称名寺式初頭に比定出来るものである。第20図(図版18下)はやはり床面上直上から出土したものでNo.1は胴部に棒状具で深く



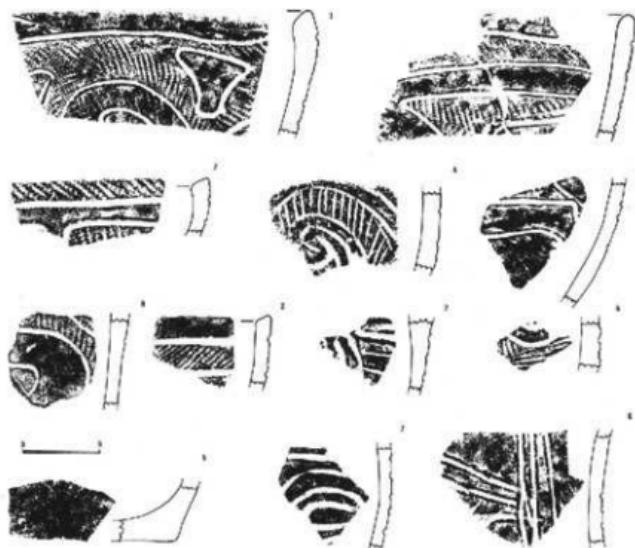
第15図 2号石住居址出土土器 9-11炉竈内埋甕 13、14、床面直上

刺突した文があるもので壺之内式であろう。No.5のように条線のある曾利式も含まれている。第19図(図版18上)のNo.1、5は口縁付近に強い深い沈線を描いていて、これらの二破片は図版17のNo.6と同種のものである。No.9は注口部である。第15図と第20図(図版18)ではNo.6やNo.5など曾利式や壺之内式のものもみられるが大半は称名寺式前半に比定出来ると思われる土器である。第21図(図版19の上)では称名寺期比定のものも見られるが、No.1、3、4、7など曾利式IV、V壺のものが目立っている。第24図(図版20の上)でNo.2、3、9は口縁部に横に沈線を引き、これに沿って比較的太い棒状具で刺突している。これに類似するものとして第23図(図版21下)のNo.3、No.14、第27図(図版22の上)のNo.7などがある。これらは壺之内I式の特徴を表わすものである。この他第22図(図版20)から第27図(図版22)までにある形式は、曾利式後半に比定出来る綾杉文・ハの字文・条線文又はそれらと沈線の組合のものがあり、曾利終末かその直後と思われる(称名寺式比定期)。纏文と山線の沈線または曲線の沈線だけのものもある。また図版22上のNo.1とNo.5は退化した橋状肥手で同図下のNo.21は綱代底である。

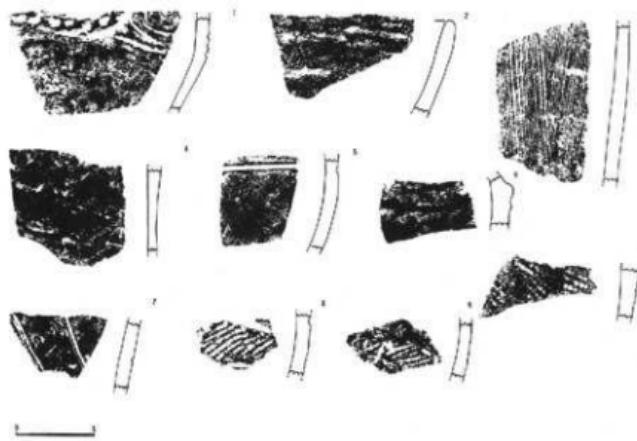
以上からみた2号般住居址から出土した土器の形式は中期後半の曾利IVかV式から後期前半の壺之内I式までの間のものである。



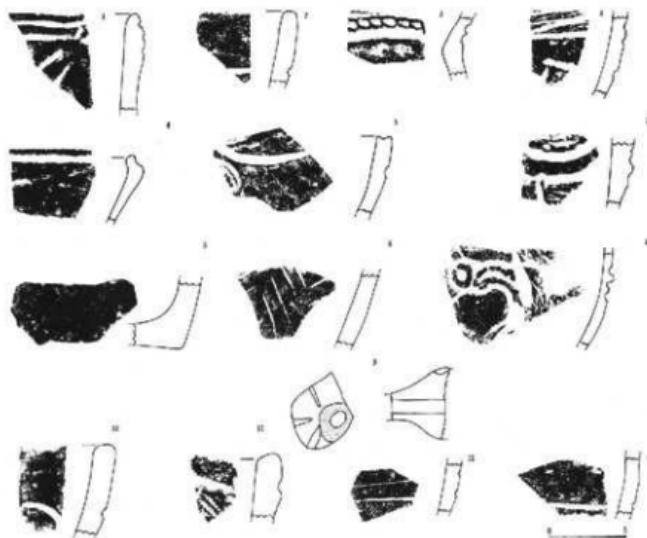
第16図 2号敷石住居址床面上出土土器



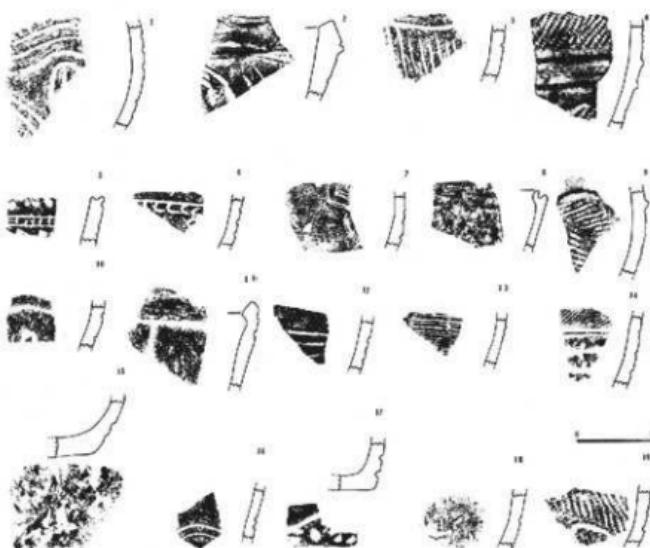
第17図 2号敷石住居址床面上出土土器



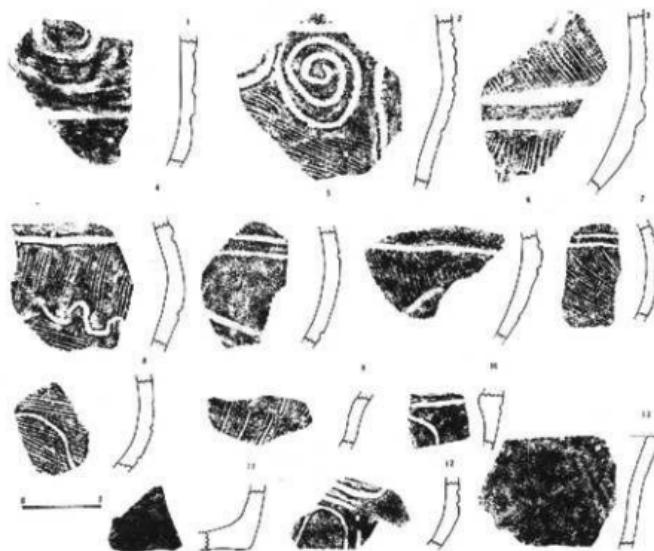
第18図 2号石住居址床面直上出土土器 1~10床面上  
1 D 22



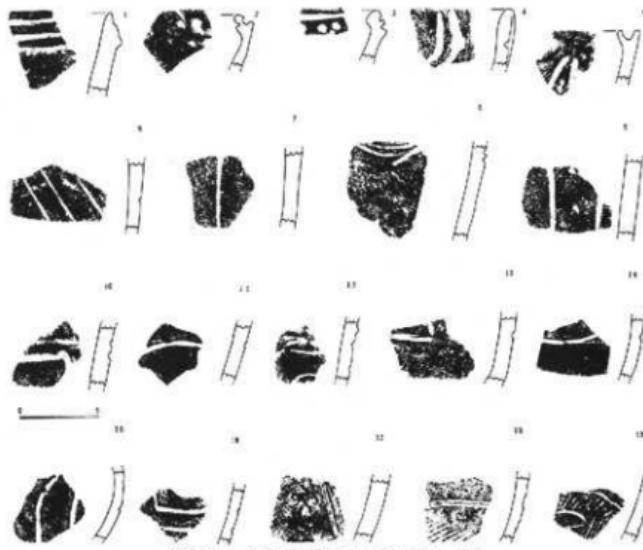
第19図 2号石住居址出土土器 1~8床面上  
9~13覆土 (9は往口部)



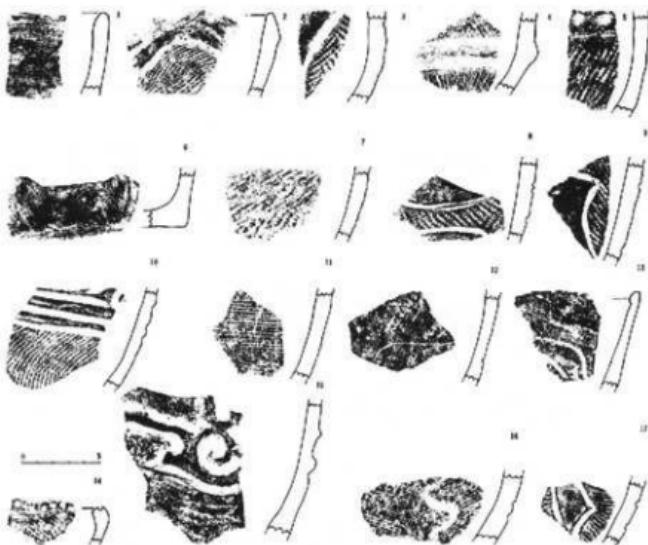
第20図 2号敷石住居址覆土出土土器



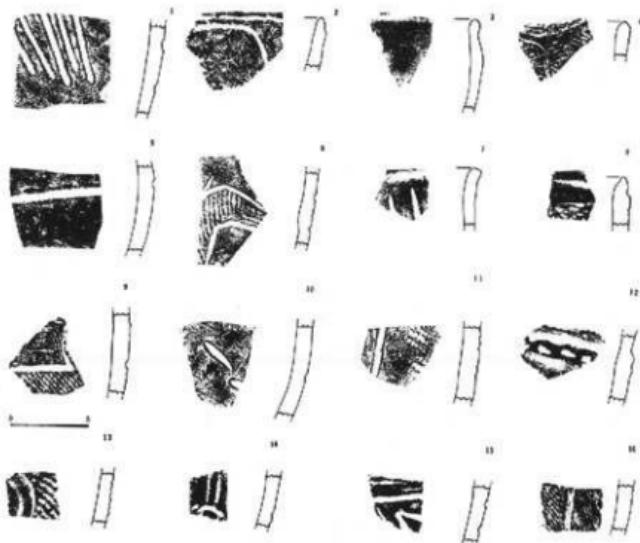
第21図 2号敷石住居址第1層出土土器



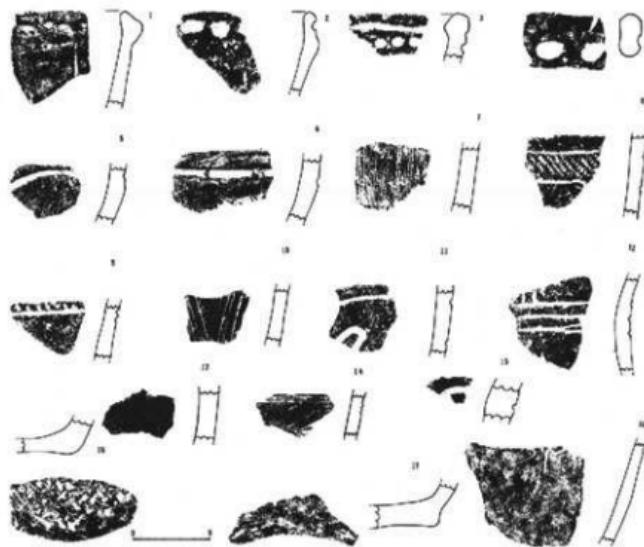
第22図 2号敷石住居址覆土出土土器



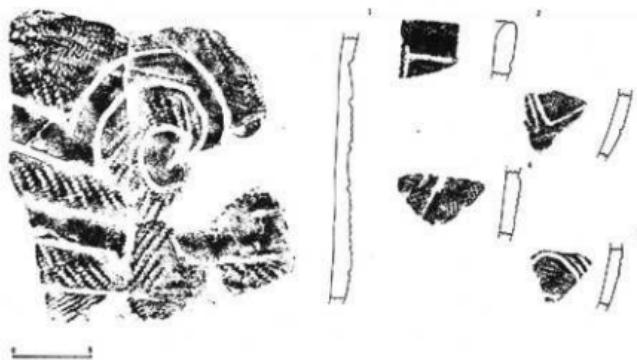
第23図 2号敷石住居址覆土出土土器 1~9 覆土 10~11、2~1 第一層 12、4 D  
6 C 第一層 14~16、8 P 17、B 3 グリッド



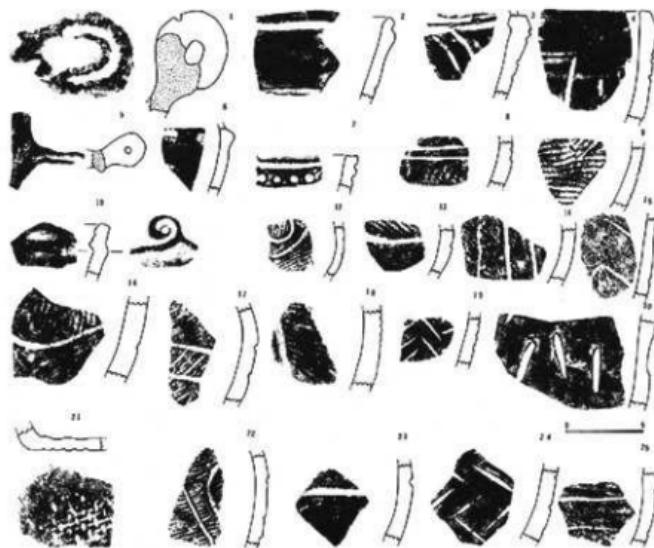
第24圖 2號石住居址第1層出土土器



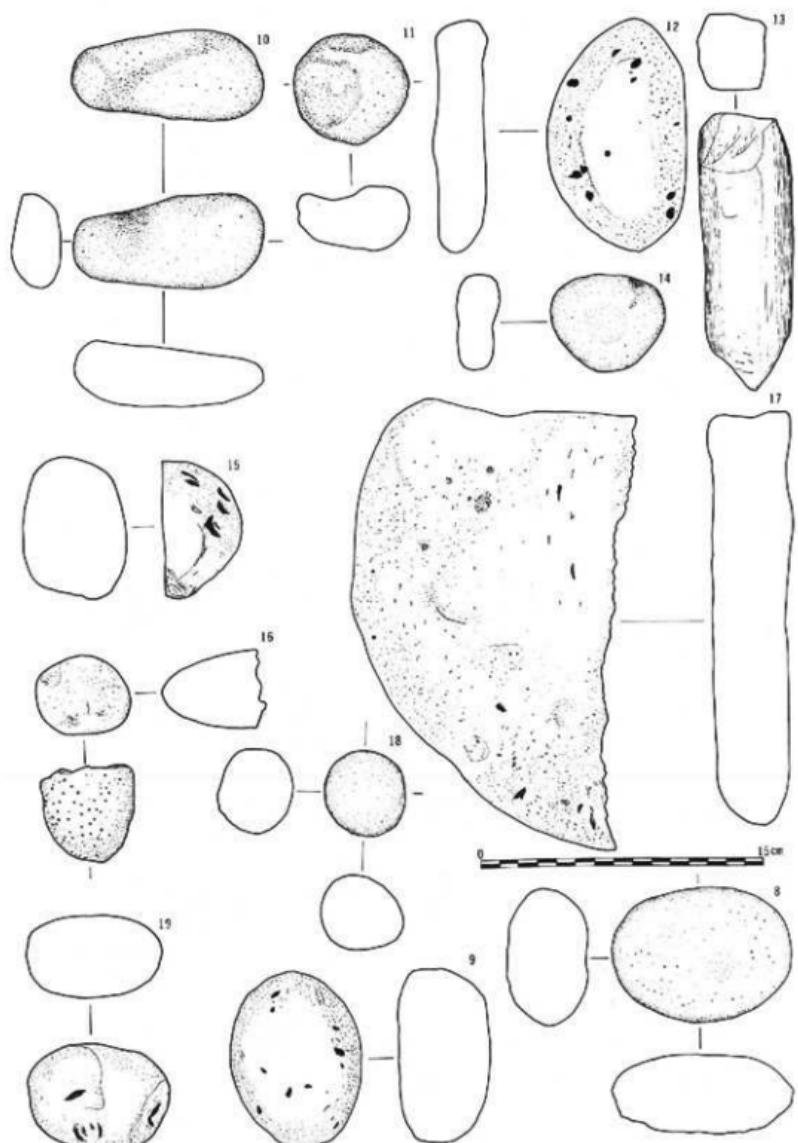
第25圖 2號石住居址第一層出土土器



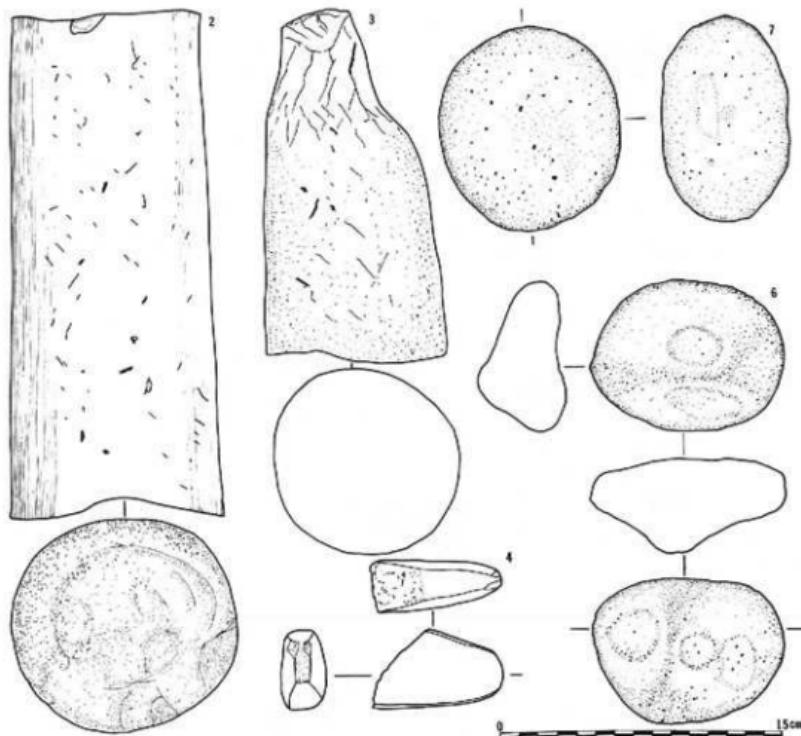
第26図 2号敷石住居址第一層出土土器



第27図 2号敷石住居址北の外覆土出土土器



第28图 2号散石住居址出土石器  
10、12、14、15、覆土  
11、西壁外 16、7G  
9、13、17、19、床面直上 8、北侧外  
18、外侧

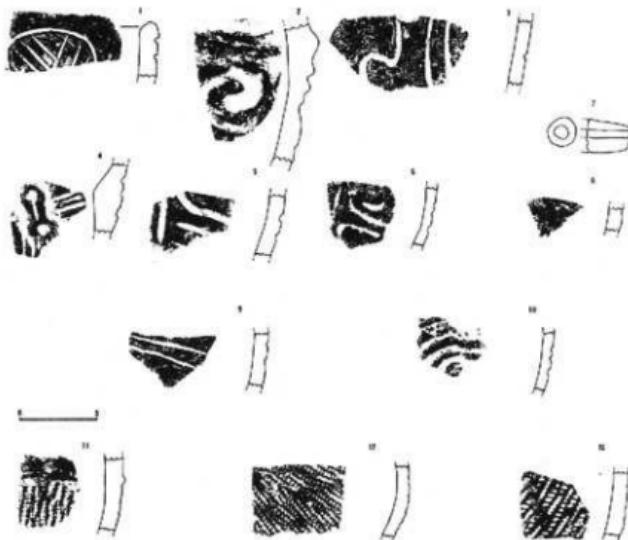


第29図 2号敷石住居址出土石器 2. 3. 4. 6. 7. 床面直上

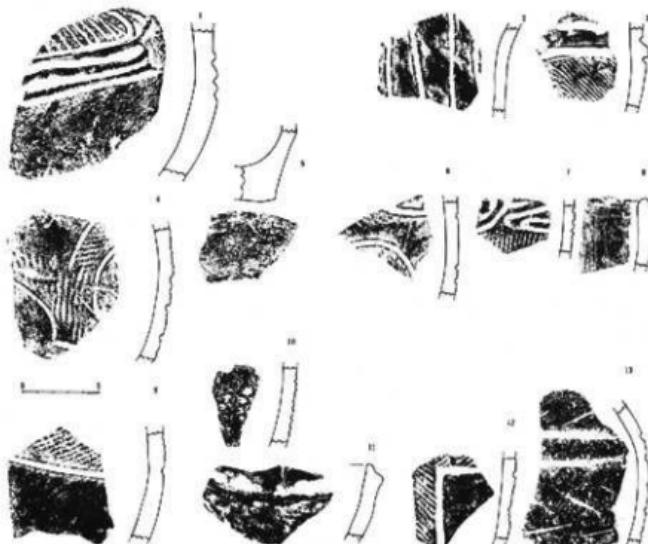
石器 2号敷石住居址では非常に多量の石器が検出された。出土状況は覆土と床面直上及び敷石を構成する石そのものの中にある。その種類は石棒破片、石斧、凹石、石皿破片、丸石、敲石状のものなどがある。ここに掲げるものはその一部であり、敷石を構成する石器のほとんどは未だそのまま現地で保存したため実測が済んでいない。

第30図No.2、3（図版24）の石棒はよく研磨され、断面もほぼ円形で丁寧に仕上げた感じを受ける。No.3はその頭部と思われる部分を故意に打ち欠いたと思われ、周囲全体に剥離面がみられる。第30図No.6（図版23下）は片面の中央部を3cmばかり凹め、他の片面には3ヶ所中心線に沿って凹みをつけている。これに類するものに第29図No.4、8などがある。また丸石の縁辺から中央部にかけてわずかに凹みをつけ、明らかに磨耗痕があるものに第30図No.7、第29図No.11、12、15などや図版23にも見られ、この造構で多量に検出した石器である。第29図No.13は石棒破片、同No.17は石皿の破片である。

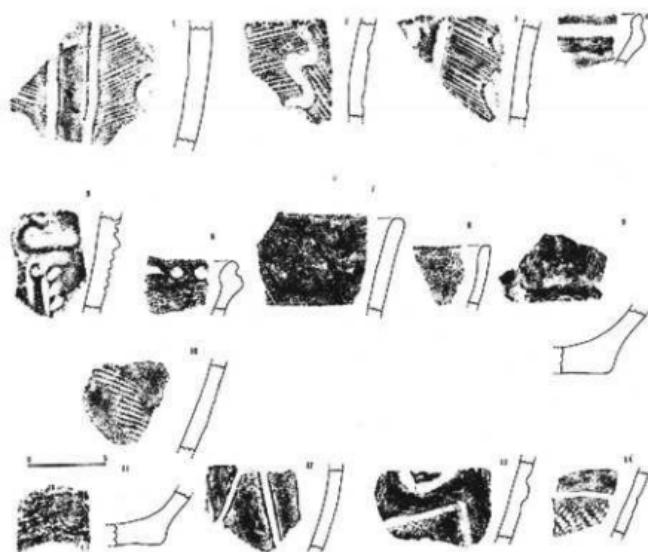
これらの石器の石質は1号敷石住居址の石器と同じで、鼓川にそのほとんどの原石があるものである。



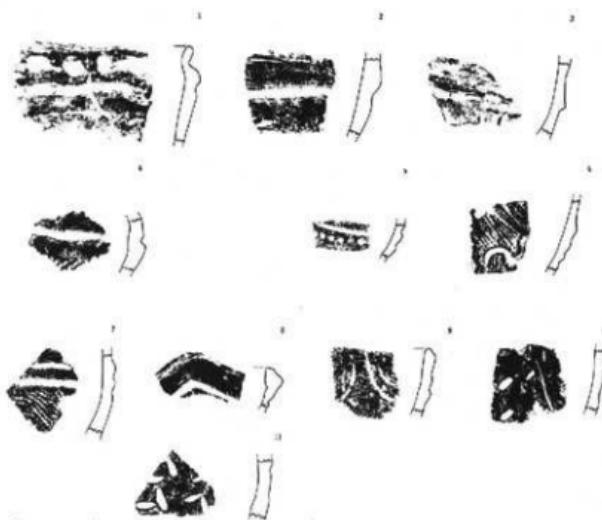
第30図 各グリッド出土土器  
1~13第一層(7は注口)  
2, 5, 10, 11, D6



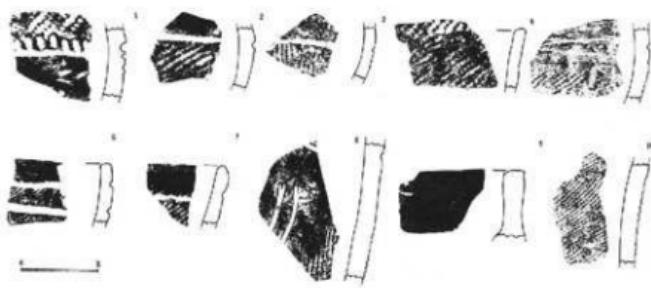
第31図 各グリッド出土土器  
1~5 A2第一層 6~8 E2第一層  
9~13 G7



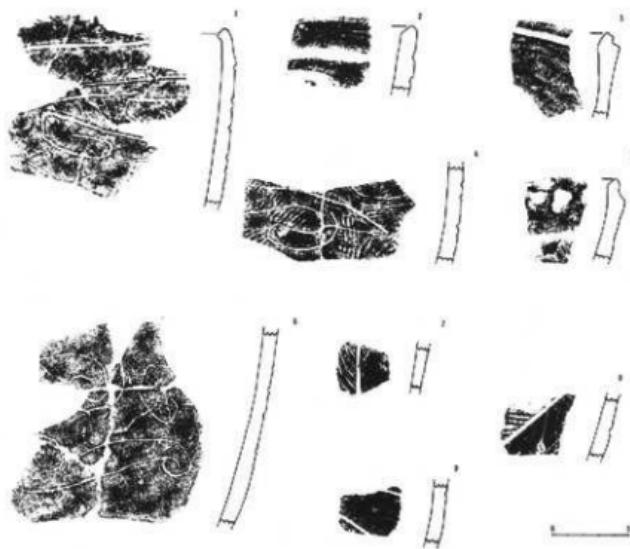
第32図 各グリッド出土土器 1~5 A 3 6~9 1 7 10~14 A 1



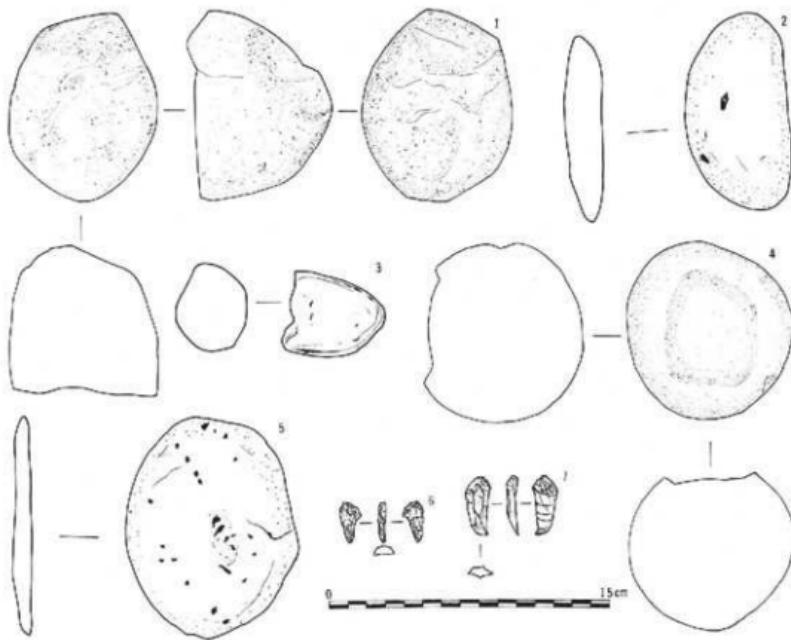
第33図 各グリッド出土土器 1~4 C 2 5~6 E 2 7~11 C 8



第34図 E 7 グリッド出土土器



第35図 H 3 グリッド第一層出土土器



第36図 各グリッド及び表土出土石器  
 1, 4. 表土 3. 7 G 7. 7 D  
 2. 5. 7 E 6. 2 B

#### 各グリッド出土遺物（第29～36図、図版25・26・27）

土器 前述した1号及び2号敷石住居址から出土した形式類型とほとんど同じであるが、たゞ第30図No.1とNo.6は不規則な曲線の沈線だけで文様構成をしている。本県でも時には見られるものであるが、称名寺式後半期に併行するものであろうか。

石器 石器も前述したものとほとんど同類である。ただ第36図No.7は黒曜石製のブレイドである。No.6は変形なものであるがやはり黒曜石製である。ここでは他には先土器時代の石器は発見されていない。

遺物は土器と石器とがあり、炉址の中にレベルを異にして甕が次々に3個体埋めてあり、また張出部と主体部の接合部にも埋甕があったことは埋甕がこの遺構に重要な意味をもつものであることを暗示している。これらの遺物は全て中期末葉の普利IV式又はV式から後期前半の堀之内I式に比定出来るものである。

本県内では敷石住居址は全体的に後期初頭のものが多く、中期後葉のものはそれより少ない。

昭和54年8月までに確認された遺構数は16基、不確実なもの10基が知られていて、地域的には多くが都内地方（主に県内東部山岳地帯）で、国中地方（主に甲府盆地）には、確認されたものが当該遺構を含めて6基だけである。また大泉村金生遺跡では昭和55年7月頃、一部敷石を伴う柄鏡型住居址と方形配石及び円形配石が階段状に配置され、この3者がセットになって数組連続して並んでいるものが発見された。都留市厚原の牛石遺跡では55年7月に大規模な中期終末期の配石遺構の一部がやはり開場整備事業の緊急発掘で発見されている。ここにはいわゆる敷石住居址は今のところ検出されていない。このような遺構との関連をどう考えるかは今後の問題点であろうと思う。

敷石住居址はその敷石部が時代が下るに従って大きくなるといわれている。本遺構2号敷石住居址は盛行期よりさらに下って、形式化し、その一部の敷石を省略し、簡略化したものと考えられる。これは敷石住居址として欠かすことの出来ない部分に石が敷かれたと見ることが出来る。また注目すべきことは敷石の中に研磨された部分や円錐形に穿たれたと思われる穴があることである。石器製作址として欠けた条件もあるが、何かそれとの関連を連想させるものがあることも付け加えておきたい。

なお2号敷石住居址は町で保存し見学施設を設置して、昭和51年3月31日に町指定史跡とした。

## 第5章 平安時代の遺構と遺物（第37・38図）

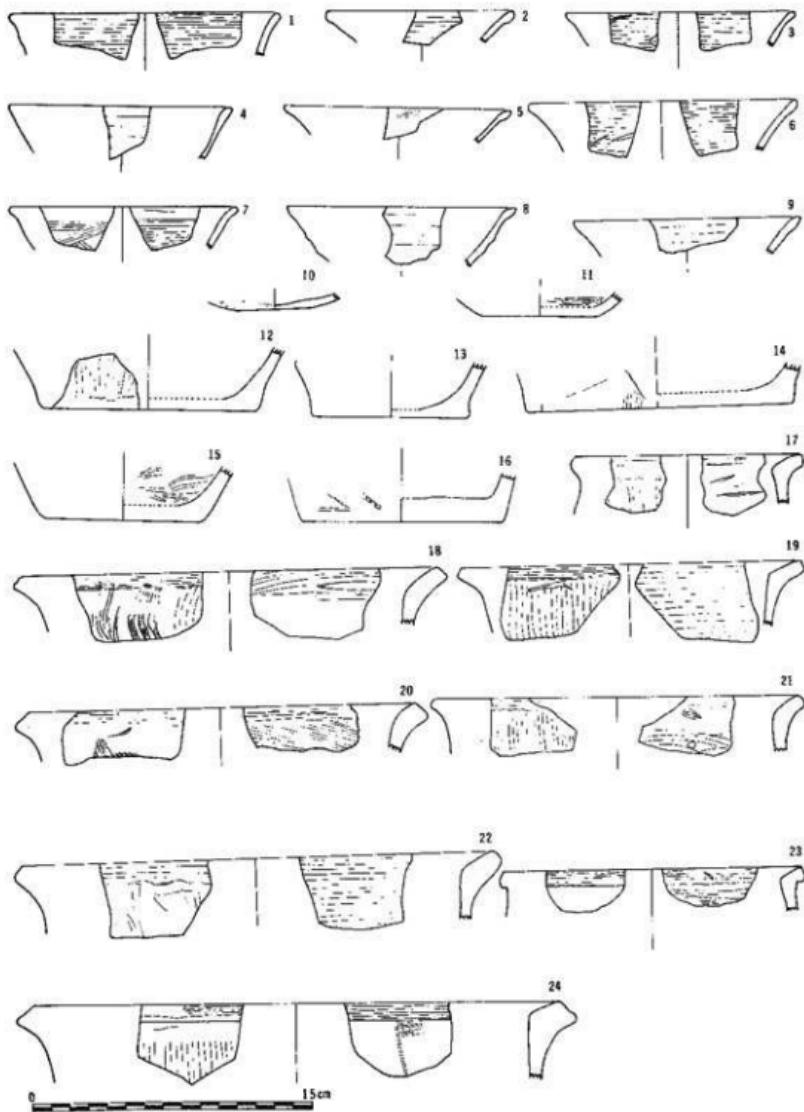
### (1) 遺 構

擾乱を受けているため明確な確認は出来なかつたが、1ヶ所カマドの袖の芯に自然石を使つたと思われるものがあり、焼土と上師器破片を伴つていた。また他にも数ヶ所土師器を伴う床面らしい踏み固められたとみられる場所が検出された。

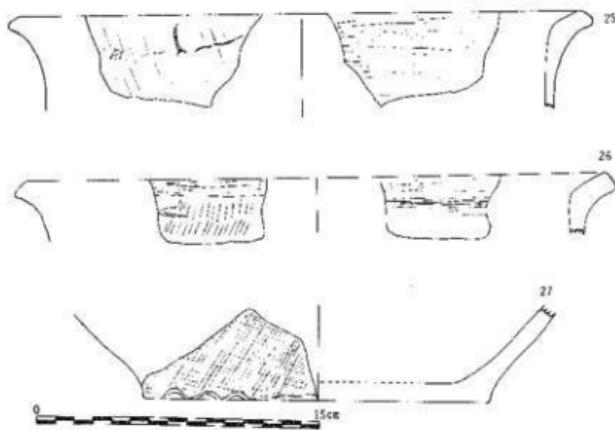
付近一帯には平安時代の國分式土器の散布がみられるので、何らかの当該時期の遺構が埋没しているものと考えられる。

### (2) 遺 物

出土量は比較的多かつたが、完形品や復元可能なものもなかった。土師器は平安時代の國分式がほとんどで、ここに掲げたものはその内後半期のものであろう。須恵器もまた數片あったがここでは第38図のNo27だけを掲げた。



第37図 出土土師器



第38図 出土土師器・須恵器(No.27)

## 第6章 結 び

この遺跡は中部山岳地帯にある秩父山系中の南部に位置し、その峡谷にある。立地は東に傾斜するフラットな場所で、南側に鼓川が東流している。ここに縄文時代中期末葉から後期初頭の遺物及び土師器が主に、東西約800m、南北約100mの範囲に散布している。遺物の散布と聚落の範囲が一致するとすれば、集落内に占める1号及び2号敷石住居址はその上(西)部にあったものと考えられる。

1号敷石住居址は、焼土を伴った石凹炉があり、その周辺にわずかに敷石が残っていたのみであった。遺存が悪かったのは、この住居址廃絶時に敷石が持ち去られたためとも考えられる。1号敷石住居址には遺物も少なく炉址の西約50cmの位置に埋甕が1ヶあっただけである。覆土から中期末の曾利V式を主体とする破片が出土したので、2号敷石住居址より1時期古い遺構であると言える。

2号敷石住居址は、ほぼ完全に遺存していた。住居址の主要部にだけ敷石を敷つめたとはいって、その整った形からして、計画的、設計的敷石住居を思わせる。遺構を構成する石に石棒・石皿・丸石など多くの破損した石器を用いているが、使用場所、方法は計画的であるとは見られない。石棒の1本は頭部の周囲を故意に打欠いたと考えられるものであったが、その使用場所、方法は特定なものを感じない。張出部は南東に向いていて、そこから北東に比較的大きい転石を乱雑に一列に並べており、その反対側に埠状の組石と思われるものがあったことは注目すべきであった。

県内の敷石住居址 (昭和56年10月31日現在)

1. 確認された遺構 16基

(森本圭一作成)

発見地	時期	現況	記録	報告
小瀬沢町平出	堀の内	破壊	図・写真	未完
長坂町塙川競馬場	堀の内	半壊		なし
中近町右左口城越	曾利 IV	埋め戻す	図・写真	発掘調査報告書 昭44年
三殊町大塚北原	曾利(?)	〃	図	史蹟・名勝天然記念物調査報告 10朝 昭10年
都留市小形山中谷	加曾利 B	〃	図・写真	発掘調査報告書 昭48年
都留市法能	堀の内	〃	写真	日本考古学年報5号 昭27年
都留市尾崎原(2軒) (道小学校)	加曾利 B	移転復元	〃	富士博物館報告4号 1960年
都留市神門	曾利 III	?	?	人類学先史学講座14 昭15年
秋山村宮岡	加曾利 B	破壊	図	富士博物館報告4号 1960年
丹波山村高尾	加曾利 E(?)	埋め戻す	図	県政60年誌 昭27年
大月市宮谷金山	?	?	写真	先史原史時代調査昭7年
大月市助橋大古屋敷	?	?	図	〃
牧丘町西保中古宿道上1890 (2軒)	曾利 V	保有	図・写真	(本報告書)
上野原町大倉367・392	堀の内	(一基)		上野原町埋蔵文化財調査報告 書I 昭56年
大泉村金生	曾利 IV	埋め戻す	図・写真	金生遠跡・昭56年
	晩期	〃	〃	

2. 不確実なもの 10基

都留市中谷

〃玉川

〃古屋口

大月市猿橋藤沢

〃下初持上原

〃般岡町日影

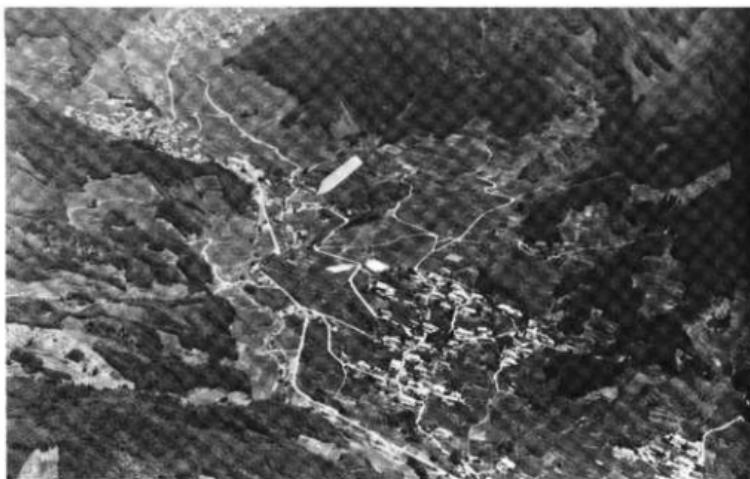
小菅村南

上野原町島田東区

〃島田東区

〃大野東大野

# 図 版



遺跡遠影（航空写真）



遺跡近影（北より）←印発掘地点



1號數石住居址



1號數石住居址



1号敷石住居址の炉



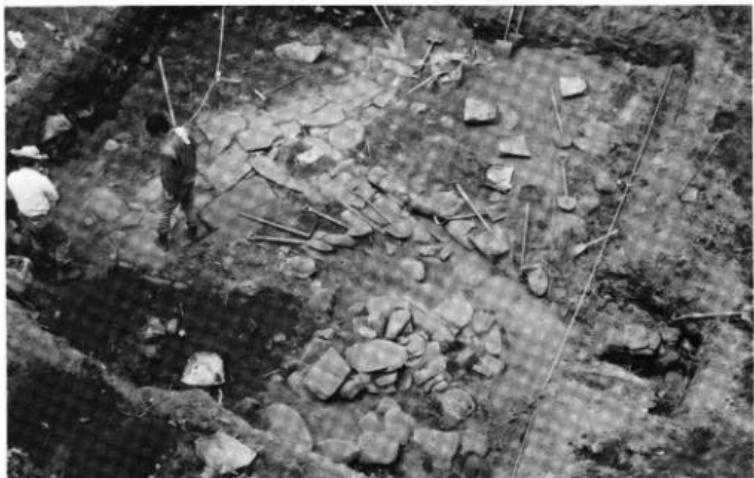
1号敷石住居址埋甕



2号敷石住居址発掘中（西より見る）



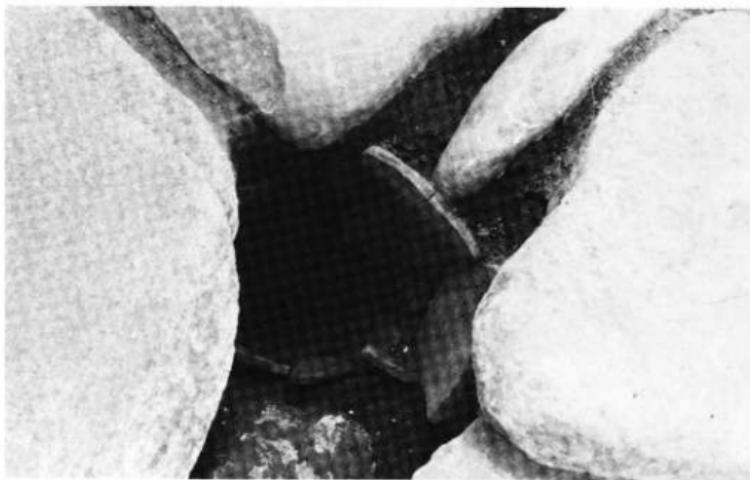
2号敷石住居址（北より見る）



2号敷石住居址発掘中



2号敷石住居址横の集石



2号敷石住居址のNo.8埋甕



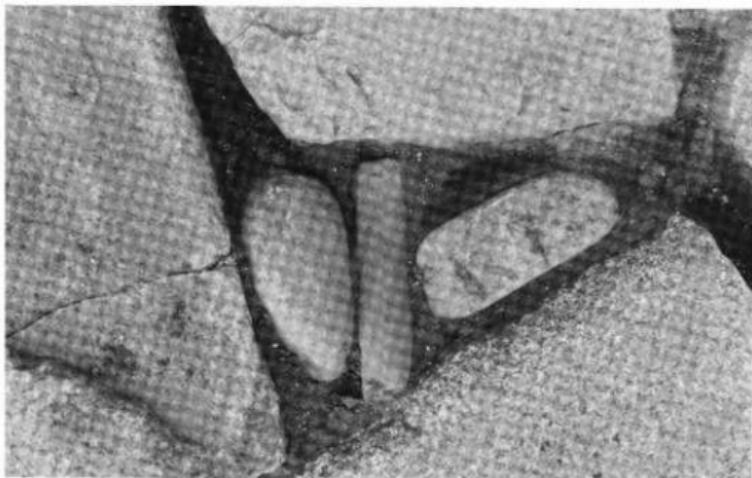
2号敷石住居址の縁石にされた石棒等



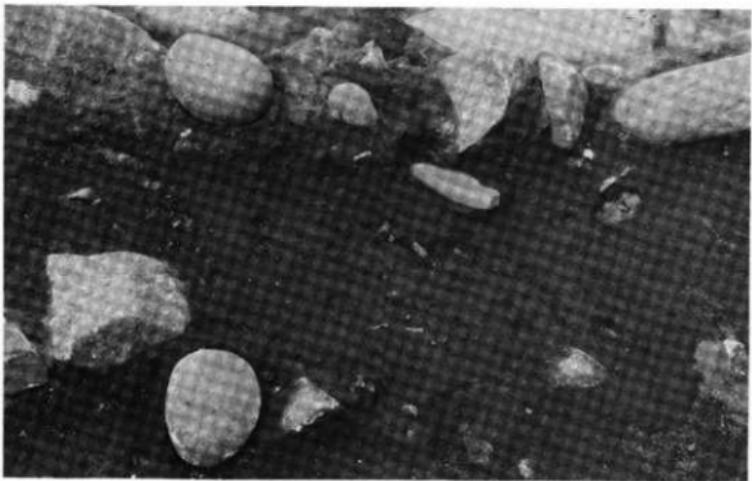
2号敷石住居址炉中のNo.10埋甕



2号敷石住居址炉中のNo.11埋甕



2号敷石住居址の研磨された石棒



2号敷石住居址の凹石等



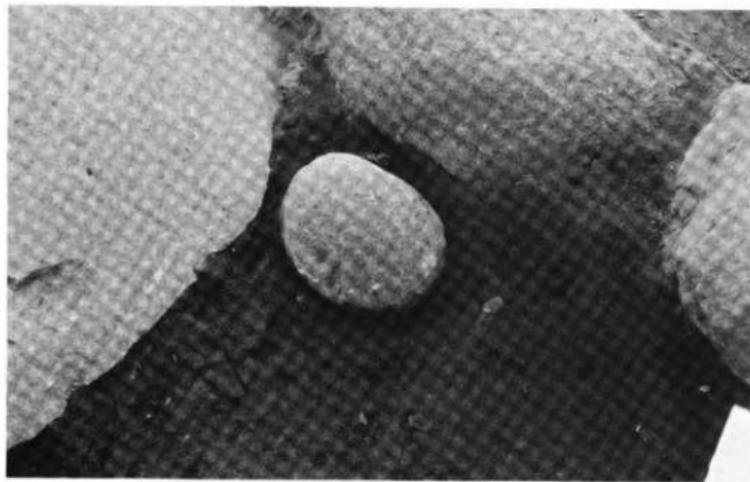
2号敷石住居址の石棒破片



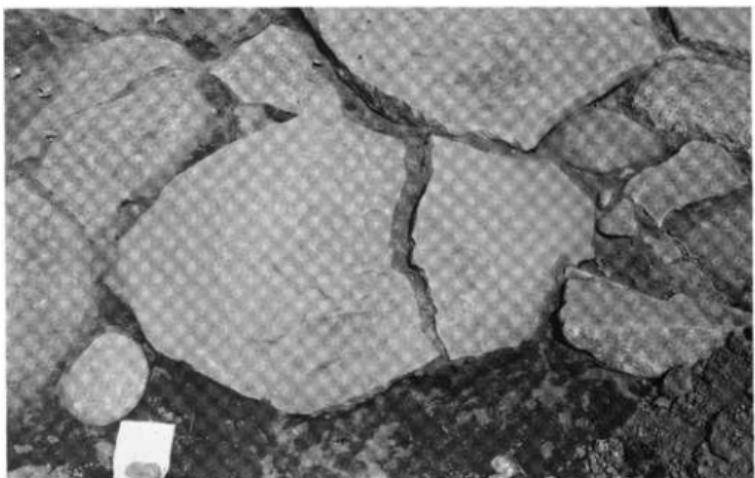
2号敷石住居址の石棒



2号敷石住居址の研磨された石



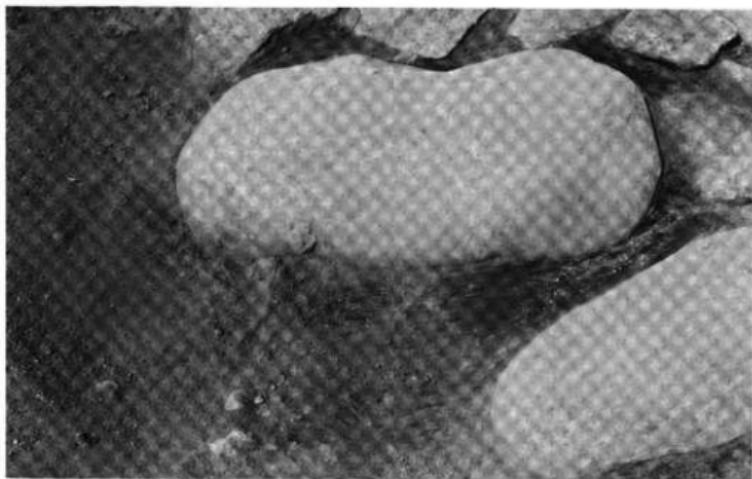
2号敷石住居址のたたき石



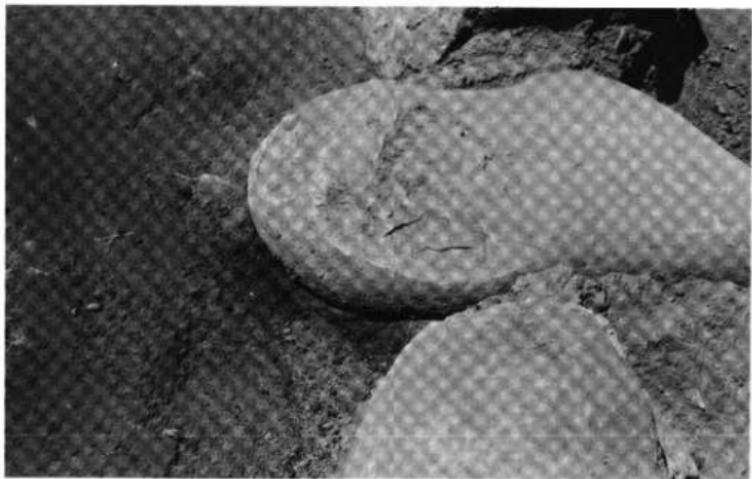
2号敷石住居址の研磨された石



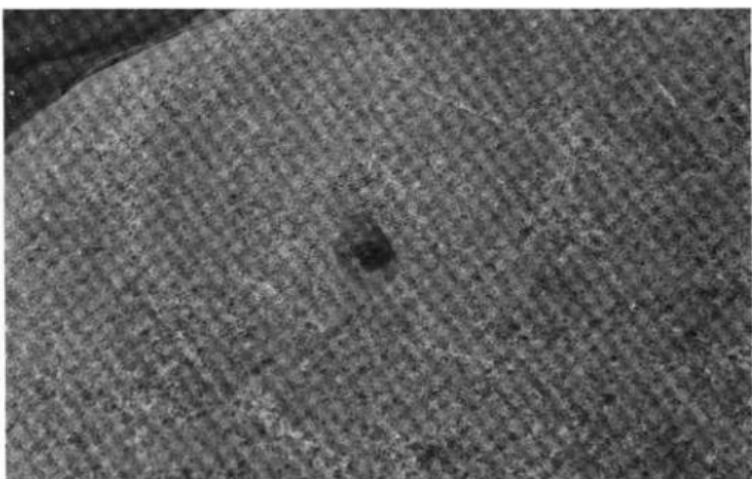
2号敷石住居址の研磨された石



2号敷石住居址の研磨された石



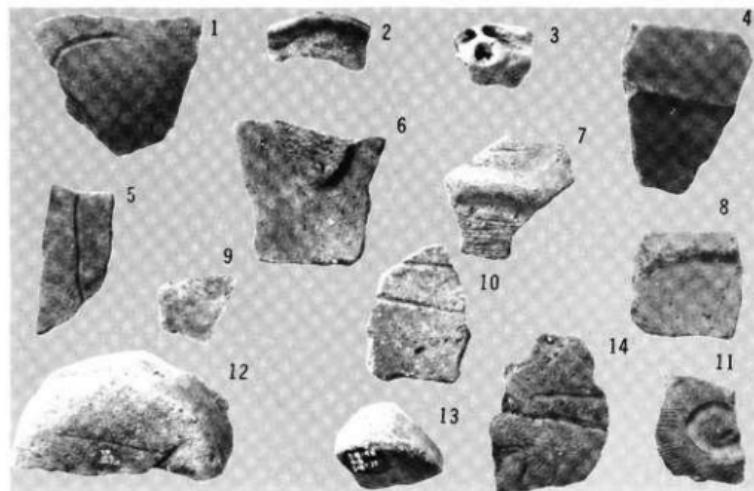
2号敷石住居址の研磨された石



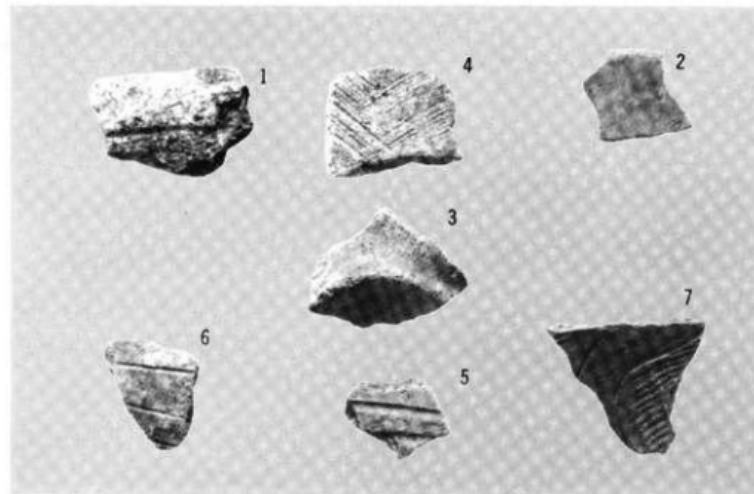
2号敷石住居址敷石に掘られた穴



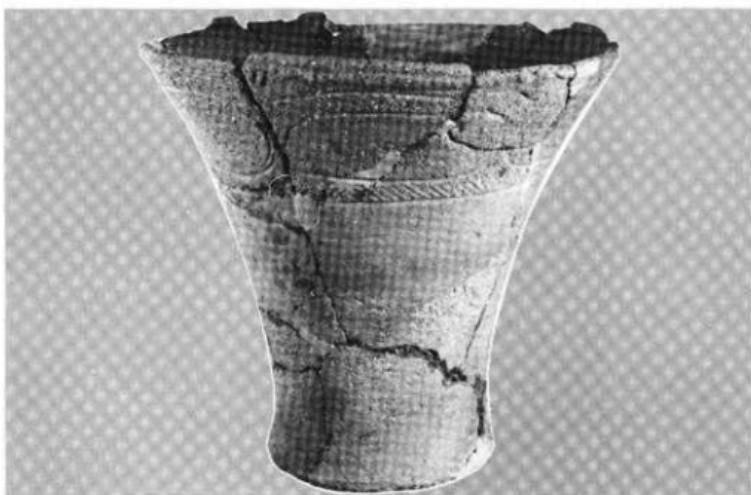
発 挖 風 景



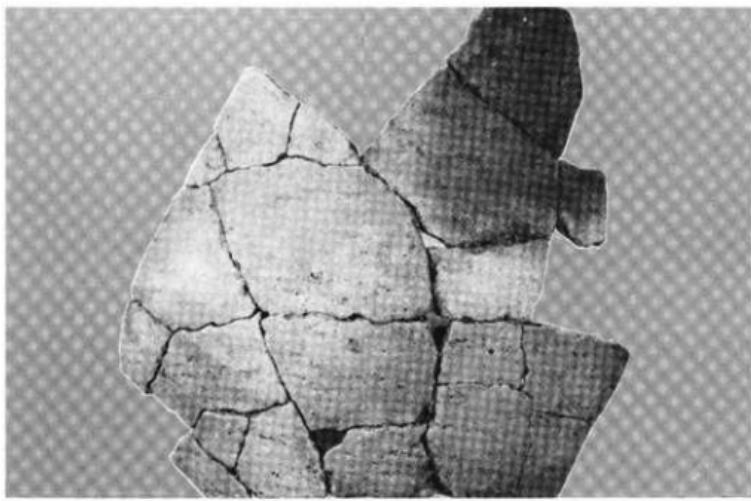
1号敷石住居址床面上



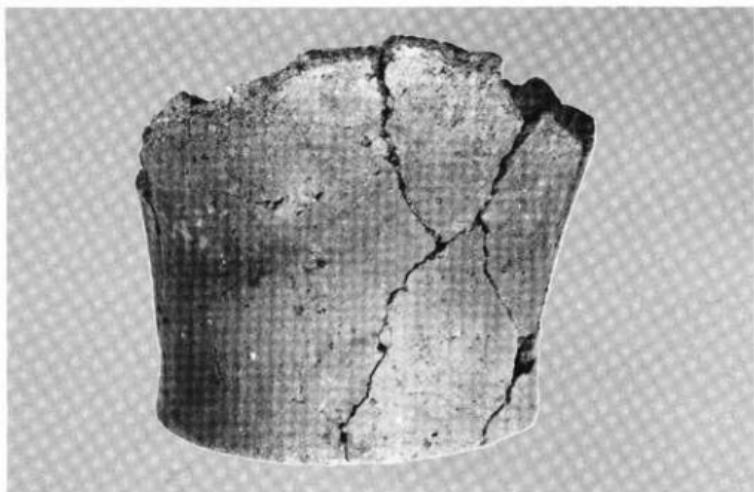
2号敷石住居址床面上



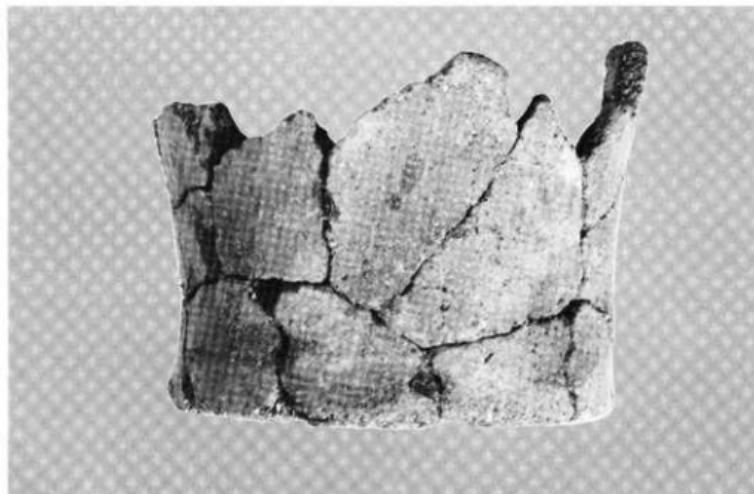
2号敷石住居址炉址内Na10埋甕



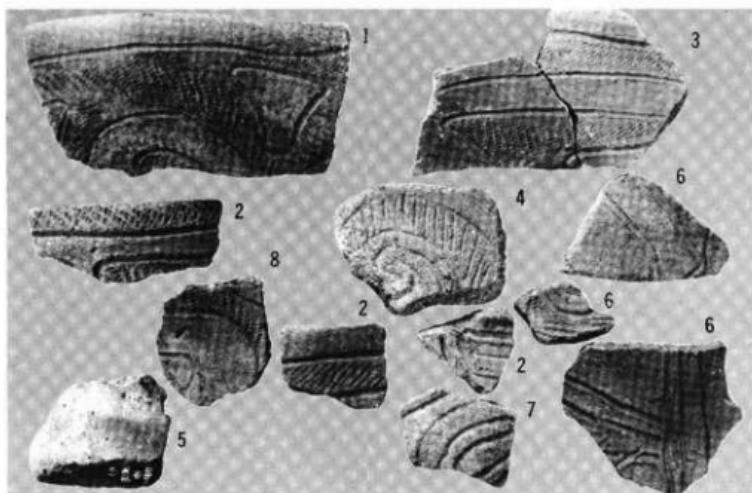
2号敷石住居址床面直上Na10の土器



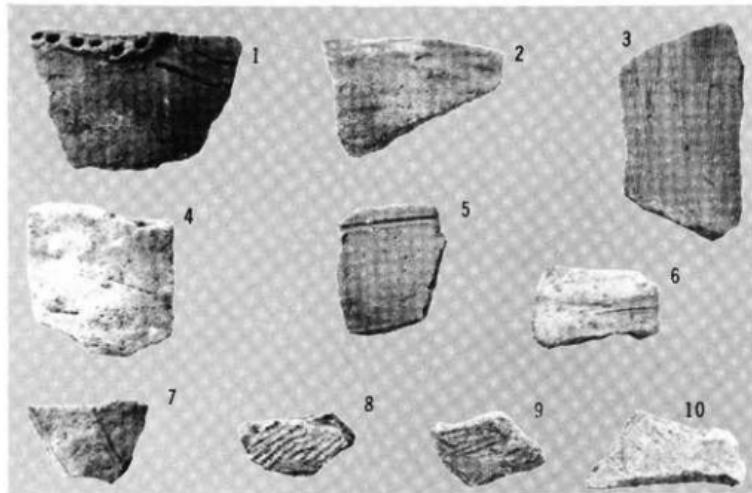
2號數石住居址爐址內No.9埋甕



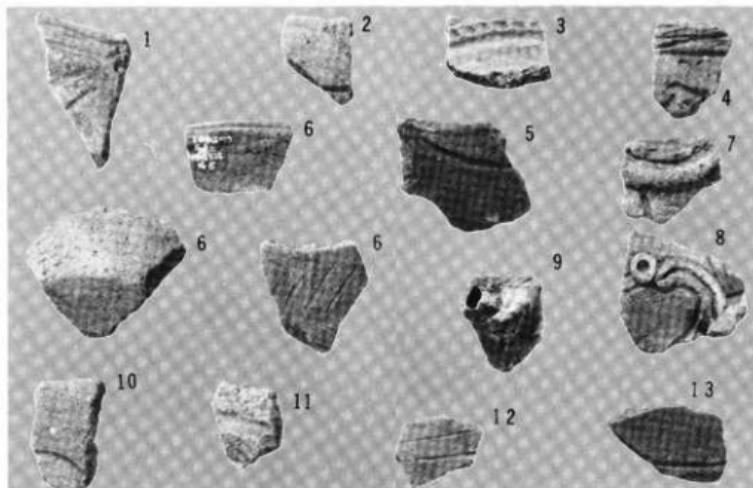
2號數石住居址爐址內No.10埋甕



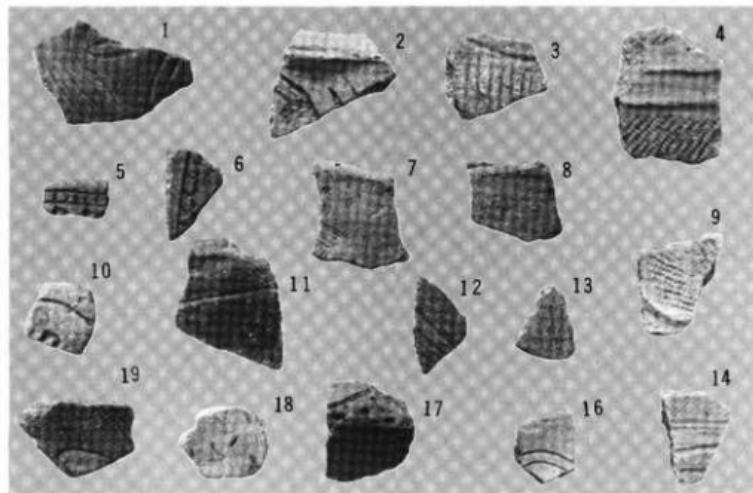
第2号敷石住居址床面直上 1~10 2号住居床面  
1 D22号



2号敷石住居址床面直上



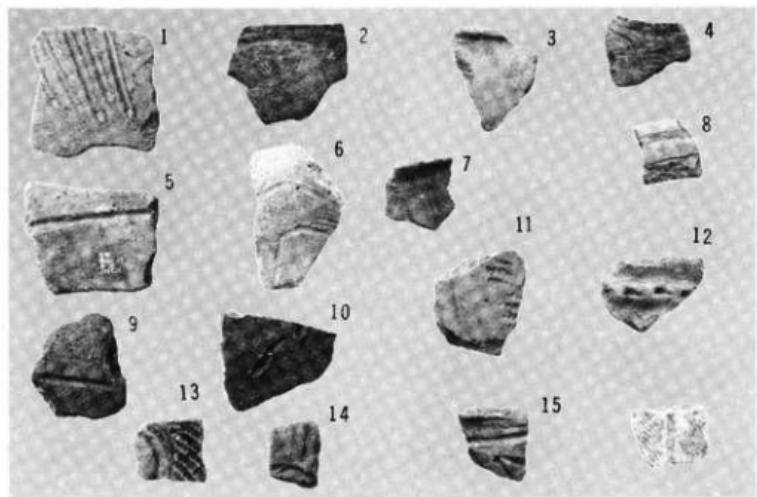
2号敷石住居址  
1~8 敷石住居址床面上  
9~13 敷石住居址第2炉址 (9は灶口)



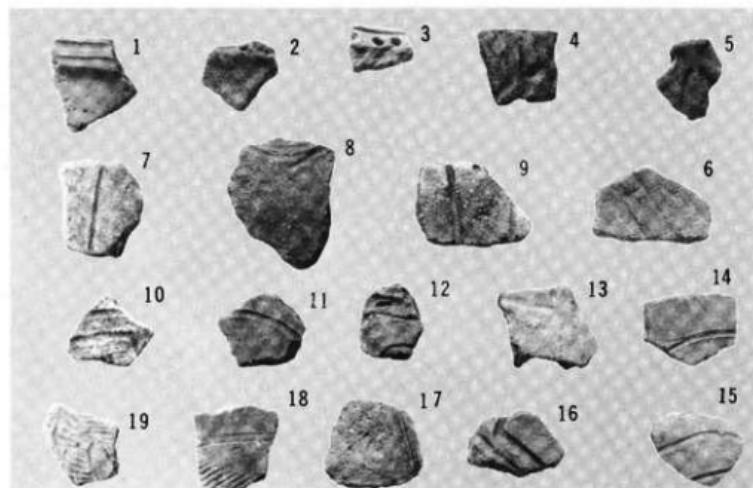
2号敷石住居址覆土



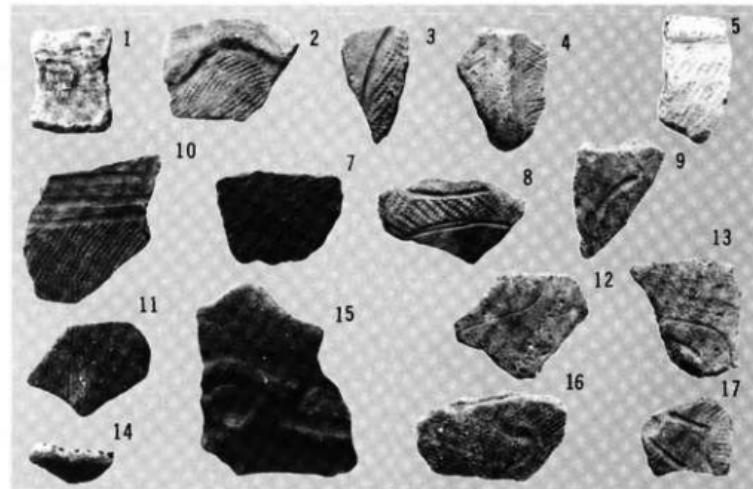
2号石住居址第1層



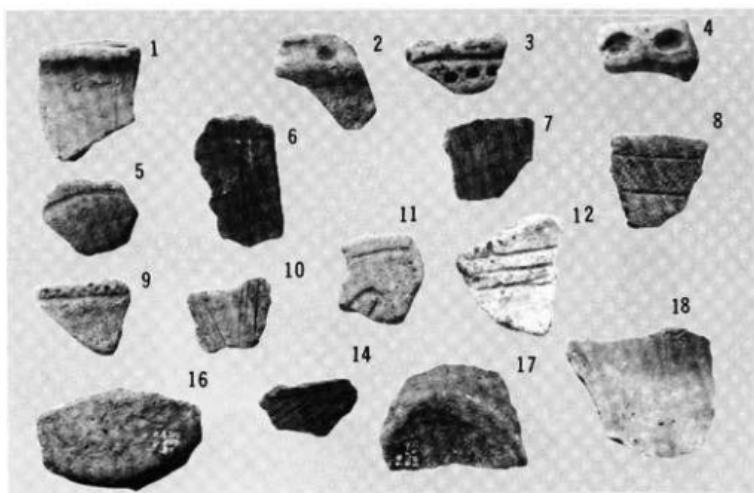
2号石住居址第1層



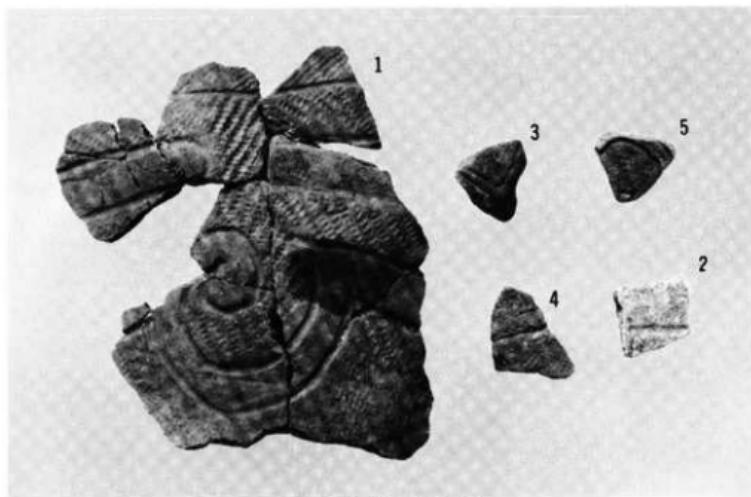
2号敷石住居址覆土



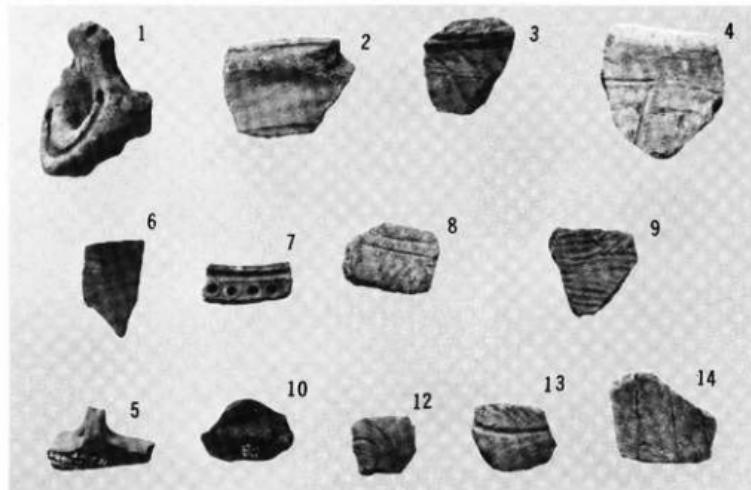
2号敷石住居址覆土 1~9 敷石住居址覆土 10~11. 2~1 第一層  
12. 4~D 13. 6~C 第一層 14~16. 8~D 17. B~3 グリッド



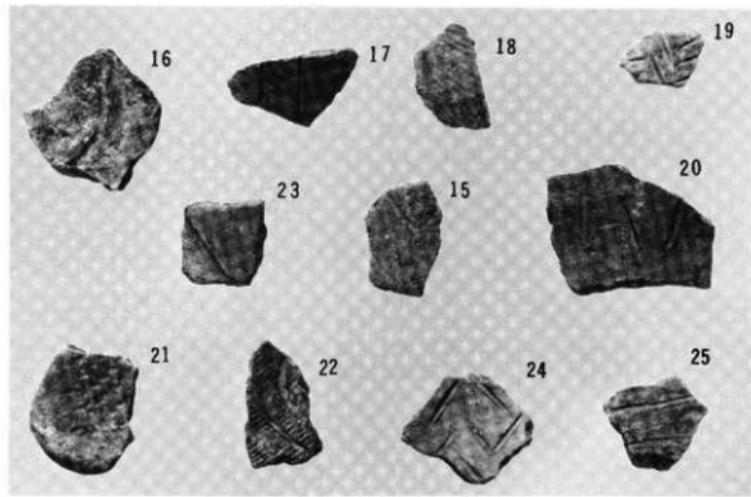
2号砾石住居址第1層



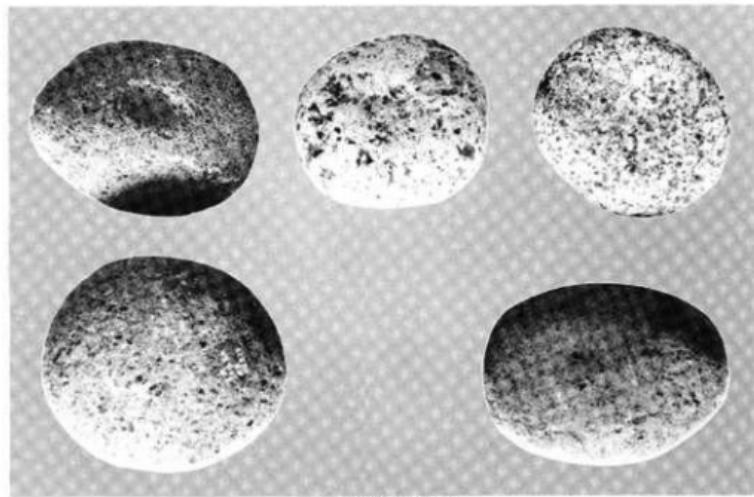
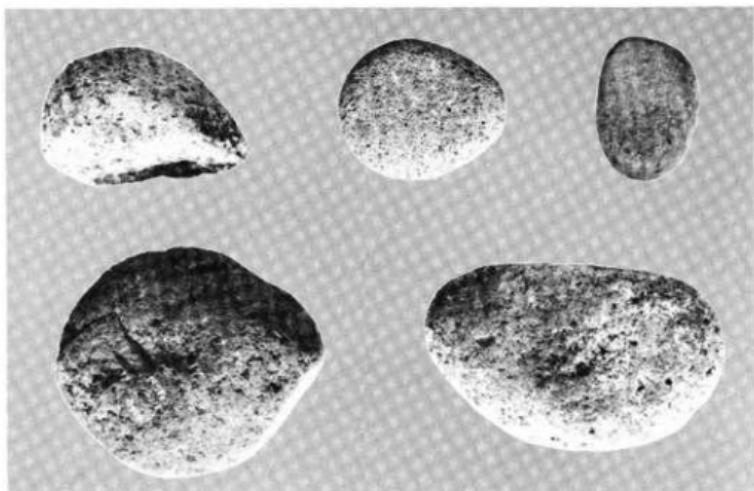
2号砾石住居址第1層

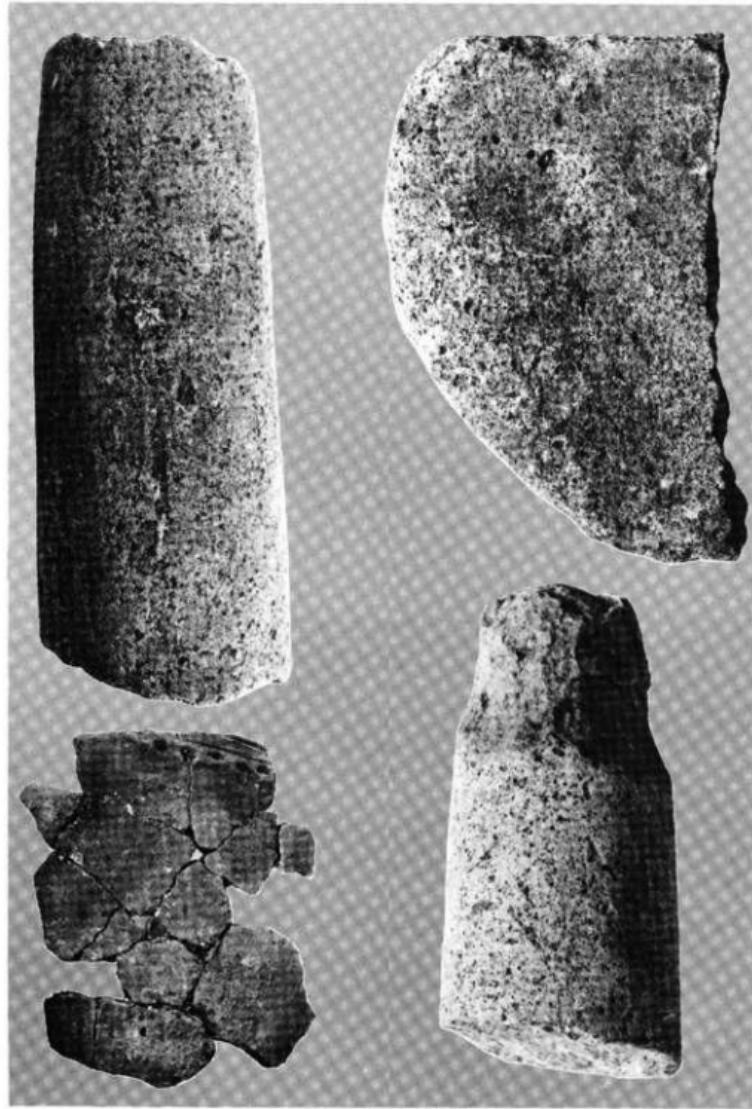


2号敷石住居址北の外覆土

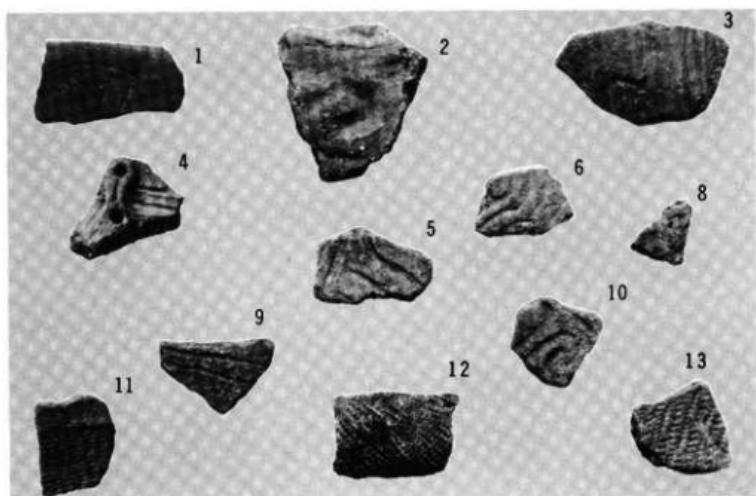


2号敷石住居址北の外覆土

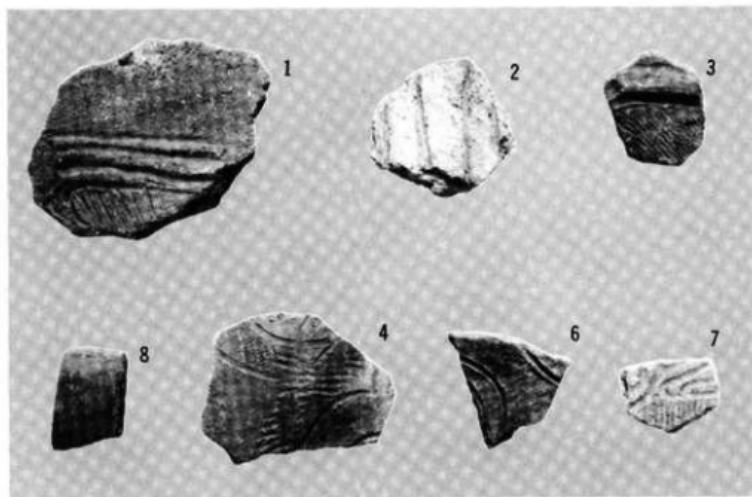




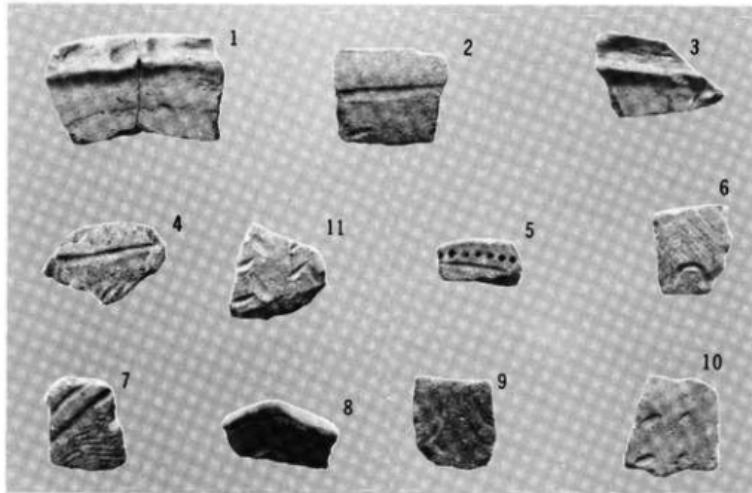
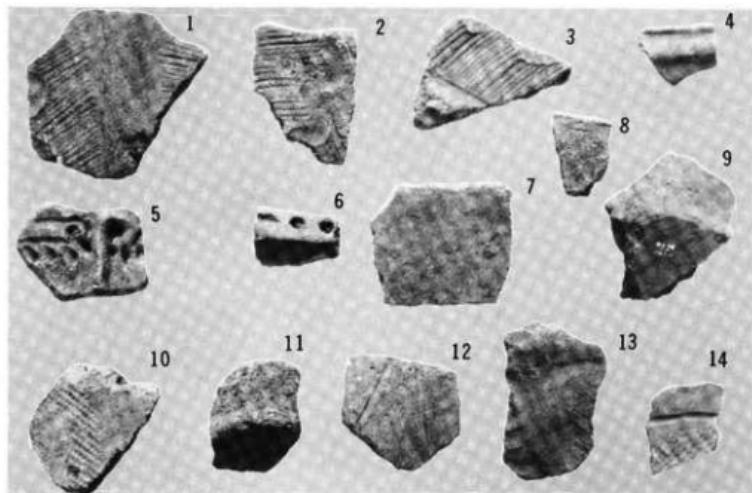
2号石住居址床面上

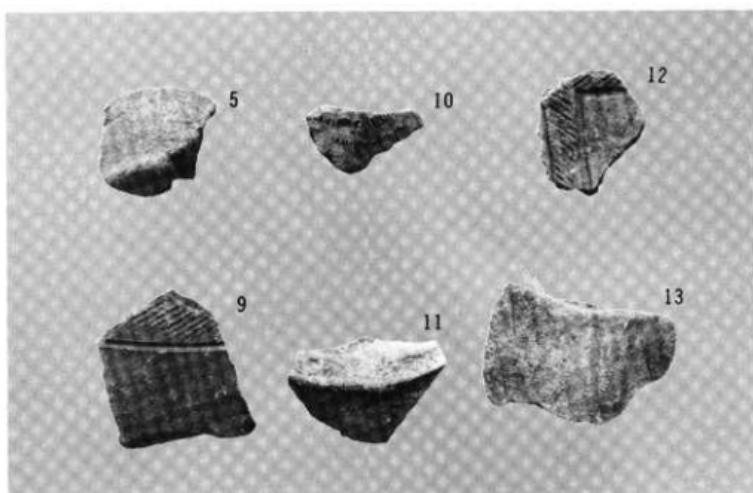


1~13第1層 2. 5. 10. 11. D6

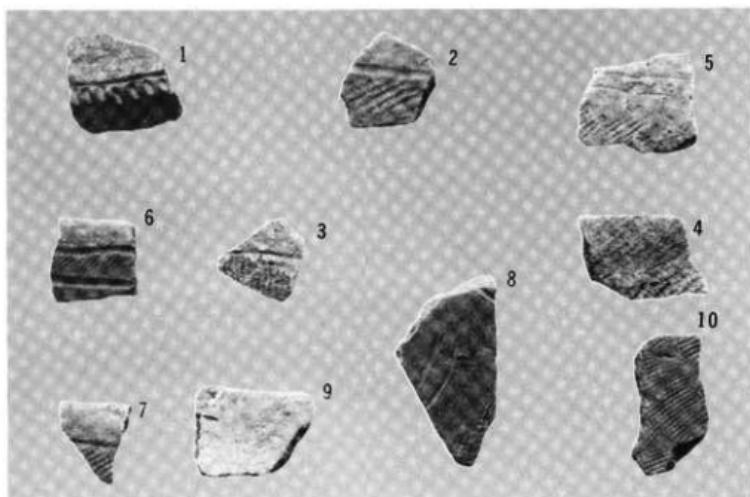


各グリッド出土 1~4、A2 第1層 6~8、E2 第1層

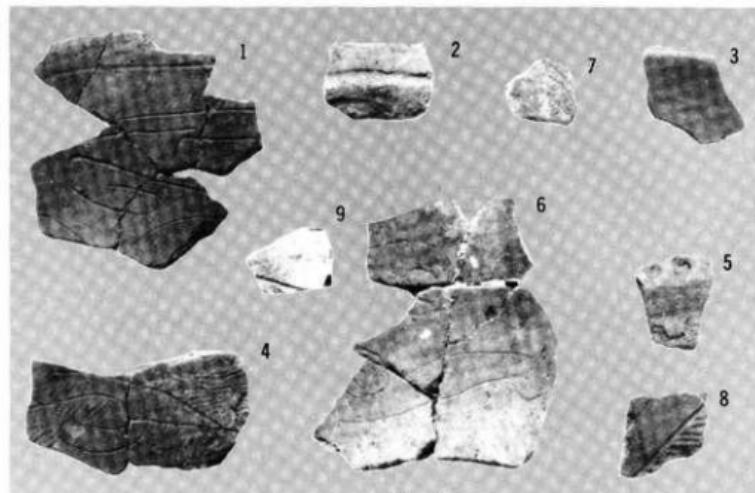




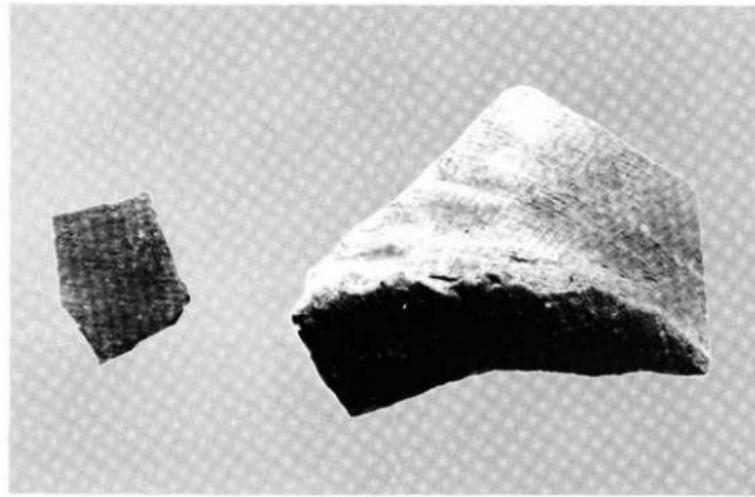
5. A2第1層 9~13G7



各グリッド出土 E7



H 3 第1層



條 惠 器

## 古宿道の上遺跡

—山梨県東山梨郡牧丘町西保一

1981年10月31日 発刊

発行 山梨県東山梨郡牧丘町教育委員会  
山梨県東山梨郡牧丘町庭平  
電話 055335-3111

印刷 合資会社 ヨネヤ印刷  
甲府市丸の内1-14の6

